

笥の悦虐（シヨタマゾ）

ロリマゾ 番外編
（蕾の悦虐）

性少年包弄記 怨辱編



濠門長恭

目次

登場人物	- 2 -
注記	- 3 -
1. 不適合者の矯正所.....	- 4 -
2. オトコ女オンナ男.....	- 18 -
3. 新入生への仕付け.....	- 32 -
4. 寒風下の洋上訓練.....	- 55 -
5. フンドシで農作業	- 68 -
6. 恐怖の総括反省会	- 76 -
7. 罰直と洗脳の日々	- 89 -
8. 新教官は戸坂先生	- 101 -
9. 強制捜査と解放劇	- 107 -
後書き	- 116 -

登場人物

畑山 薫

体育教師の戸坂にマゾ調教されたが、戸坂が去って後、ひとりでハッテン場をうろついで補導される。親の命令で自主謹慎中。

戸坂 智臣

大物議員の三男坊。体育教師になったのは、獲物を漁るため。薫との関係がスキャンダルになりかけて身を引いた。

小塚 宏 (所長)

全寮制スパルタン・カッタースクールの創始者。社会的に不適合な青少年の矯正を謳って、入所者の親から法外な教育費を得ている。

山口 和弘 (指導教官)

スクールの第一期卒業生。過去に自分の受けた虐待を寮生に繰り返している。

鈴木 拓馬

中堅企業社長の長男。労災隠しの犠牲者を家の金を持ち出して救済した。

正木 翔子

男装のレズビアン。下級生と双頭張形で同時破瓜。ばれて悪者にされた。

「そんなに男装がしたいのなら」と丸坊主にされて、男子の部屋へ入れられている。

注記

本文は（ほぼ）常用漢字のみで表記しているのので、不自然な当て字も使っています。

この作品はフィクションです。実在する（した）人物・地名・組織・史実・年齢とは関係がありません。また、特定の思想などを賛美もしくは非難するものでもありません。

1984年を舞台としているため、現在では不適切な用語や思想が取り扱われている場合があります。

登場人物の言動について

この小説では、女性への蔑視や性的少数者への差別的な言動が縷々描写されています。これは、作品の成立に必須のフィクションであり、断じて作者の意見表明ではありません。その実、本音か否かは——さあ、どうでしょうねえ。

カッター（短艇）の用語について

現在もしくは1980年代の標準的な用語には準拠していません。カッタースクールの創設者である小塚宏は、かつての軍国少年であり、戦後に読みかじった内外の海軍関係のいわゆるノンフィクションから寄せ集めた知識に依拠しているという設定なのです。決して作者の不勉強ではありません（汗）
付言すれば、筆者は少年時代に6mカッターの全国大会に出場した経験があります。作中で描写される漕法はこれに基づいていますので、現在の一般的な漕法とは異なっているかもしれません。

1. 不適合者の矯正所

戸坂先生がスキャンダル新聞で僕との関係を暴かれそうになって、僕をかばって——というより、政治家の父親を巻き込まないため、僕は付け足しだろうとひがんじゃうけど。とにかく、辞職してしまった。マゾに調教されちゃった僕は被虐願望を抑えきれなくて、見つかったら言い訳できないような服装でハッテンバをうろついて。うまく男の人をキャッチできたところを、巡回中の刑事さんだか補導員だかに捕まって。学校に通報されて親にも連絡されて。警察はお説教だけで済んだけど、パパは大激怒。自主謹慎を申し渡されてしまった、学校でもあれこれウワサになってるんだろうけど、クラスメートは誰も会いに来てくれないから、分からない。

家の中でだって、自分の部屋から出るのは食事とトイレとお風呂のときだけ。テレビも平日にひとりで観るのは禁止で、夕食の後に1時間だけ。他の子が学校へ行ってるあいだは、自習と自習と自習。自主謹慎というよりも、座敷ろうだよ。

座敷ろうの中でクリスマスを（イベント無しで）過ごして、1984年のお正月も無しで。座敷ろうの外では3学期が始まった。

そんなある日の朝。僕の部屋にいきなり、知らない人が2人訪れた。小柄な小父さんと、プロレスラーみたいにでかいお兄さん。後ろにはパパもいる。

「畑山薫くんだね。きみはこれから親元を離れて、全寮制のスクールで暮らすことになった。私たちと一緒に来なさい」

「息子をよろしくお願いします」

パパが、小柄な小父さんに頭を下げている。当事者の僕には何の相談もなく、転校を決めたんだ。たぶん、僕には文句を言う権利もないんだろうけど。でも、いちおうは言っとかなきゃ。

「そんなの、聞いていません。ちゃんと説明してください」

「来れば分かる」

プロレスラーみたいなお兄さんが僕の腕をつかんで、椅子から（立ち上がらせたってよりも）ぶっこ抜いた。

そんなことをされたら「はい、行きます」なんて言えない。

「イヤです。ちゃんと説明してください。それに、行くとしても支度をしなくちゃならないし」

お兄さんが問答無用で僕の腕を背中にねじ上げた。

カチャ……聞き慣れた音と、知り尽くしてる金属の冷たい感触。手錠を掛けられた。

先生やサディストの人たちに手錠を掛けられたら、胸がきゅうんと切なくなって、粗チンも硬くなってくるんだけど、もちろん今は、そんなふうにはならない。

なにかとんでもないことをされるんじゃないかって不安だけ。

「やめてください！ こんなことしなくたって、きちんと説明してもらって納得したら、言うことをききます」

小柄な小父さんがボールギャグを取り出した。

僕は口を固く閉じて、そっぽを向いた。

「これが何か、分かっているようですね。それだけ、変態に染まっているということです。

矯正はなかなか手間取りそうですね」

小父さんがパパに向かって、僕のことをボロクソに言う。そして、ボールギャグを僕の口に突きつける。

僕はさらに顔をそむけたのだけど。

ぼふっ……プロレスラーにお腹を殴られた。

「あう……」

半開きにした口にボールギャグを押し込まれた。バンドがほっぺたをくびる。

「あの……手荒なことは……」

「息子さんの教育については一任していただいたはずですよ。口出しなさるなら、御引き受けできませんよ」

パパは黙り込んでしまった。

口をマスクでおおわれた。覆面じゃなくて、風邪引きとかで着けるやつ。

「おとなしくしていれば、手荒なことはしない。ついて来なさい」

もうじゅうぶんに手荒なことをされてるし、ついて行くもなにも、二の腕をさらにねじ上げられて、引っ立てられた。裸足のまま玄関から引きずり出されて、運転席以外の窓は真っ黒なフィルムで隠されたバンの荷物室へ押し込まれた。

パパは玄関口に立って、僕がされることを眺めていただけ。声も掛けてくれなかった。でも、見送りに来てくれただけマシなのかな。後妻さんは、ずっと姿を現わさなかった。

車が走り始めて10分も経ったかな。やっと、いろんなことを考えられるだけ、動転が治まってきた。

全寮制のスクールとか言ってたけど、これまでの様子だと、私設の刑務所みたいどころじゃないだろうか。パパとしても、ホモ（自分では違うと思ってるけど）でマゾの息子がいるなんて世間体が悪い。それに、後妻さんとのあいだに出来た子供がいれば、僕なんかいなくても平気なんだろう。

だけど、スクールに閉じ込められて……出してもらえるのだろうか。そんな不安まで湧いてくる。

まるきり事情が分かってないんだから、あれこれ考えても無駄なんだけど。サディストさんたちに調教部屋へ連れ込まれるのとは、次元が違う。あれは——エッチなことやSMをされるんだって分かってる。どんなひどいことをされても、大怪我は（たぶん）しないし、最後は家に帰れるって分かってる。けれど、今は……まさか、殺されたりはしないだろう。と信じたい。

車は高速道路を何時間も走って、僕が降ろされたときには、お昼に近かったんじゃないかな。でも、そこが目的地じゃなかった。

潮の香りがした。のも当然で、そこは小さな漁港だった。また二の腕をつかまれて、波止場へ引きずって行かれる。

「んんんん……」

僕は身体を揺すって、言いたいことがあると訴えた。

「なんだ、小便か？」

僕はコクコクとうなずいた。

「もうちょっと我慢しろ。船に乗ったら、させてやる」

しゃべるのは小父さんだけで、プロレスラーのお兄さんは、ずっと無口。なことは、どうでもいい。船に乗るってことは、僕を魚の餌にするんじゃないとしたら、全寮制のスクールというのは、どこかの島にある。ますます脱走不可能な刑務所を連想してしまう。

ぼろっちいコートを肩に掛けられて、後ろ手錠を隠した姿で歩かされた。ボールギャグもマスクで隠されている。他人に見られるとまずいってことだ。隙を見て逃げ出せば……それから、どうすればいいんだろ。世間向けの言い訳なんか、オトナはちゃんと考えている。だから、公園の砂場にペニスを突っ込む腕立て伏せを僕にさせてるところをお巡りさんに見つかっても、戸坂先生は平然と対応してた。

もしも、この人たちの言うことより僕の言葉を信じてくれる人がいたとしても、警察に連絡してくれて……家へ連れ戻されるだけじゃないだろうか。そしたら、またこの人たちがやって来る。今度は、後ろ手錠よりもずっと厳しく拘束されて（もしかしたら箱詰めとか）連れて行かれるだけだ。

そんなことを考えているうちに、波止場の隅っこに泊まっている小さな漁船に寄せられた。漁船は、おじいさんがひとりで動かしてるっぽい。

小さな漁船には操船室だけで、客室なんて無いので、船の後ろに座らされてた。

港を出たら、立たされた。風で飛ぶといけないからだろうか、コートをはぎ取られた。

「小便がしたかったんだな？」

小父さんの質問に、うなずいて答える。

「この船にはトイレなんか無い。そこから立小便をしろ」

と言われても。後ろ手錠を掛けられてるんだよ。

「脱がしてやれ」

ごつい体格のお兄さんが僕の後ろへまわって、ズボンに手を掛けた。

「んぶうう……」

腰をひねって抵抗したら、また腹を殴られた。

「んびっ……」

胃のあたりを鈍い痛みが突き抜けて……ちびってしまった。

ズボンもブリーフも、脚から引き抜かれた。船の後ろぎりぎりまで押し出される。真冬の風が吹きつけて、足が震える。玉もサオも縮み上がる。

「すこしくらい船にかかってもかまわんから、さっさと済ませろ」

おしっこはしたい。これまでの調教で、他人に見られてもわりかし平気で出せるようになった。でも、出したくない。抵抗できないように拘束されて、強い男の人に命令されるのは調教と同じだけど。なにかが根本的に違っていると思う。命令されて、こんなに腹が立ったのは初めてだ。

「さっそく反抗するのか。山口、手助けしてやれ」

後ろに立っていたお兄さんが、僕のペニスを摘まんだ。ペニスだ。チンポとか粗チンなんて表現する気分じゃない。

「そら。さっさと出しちまえ」

寒さで縮かんでるのを、ぎゅっと引っ張られた。僕は出そうと努力した。だって、出さないでいると……

ぼぐっと、お腹を殴られた。胃よりもずっと下だったから、そんなに痛くなかったけど——それが刺激になって、またちびった。そのまま、ちょろちょろと出続ける。

風が巻いているので、脚にもかかった。

出し終わると、突き飛ばされた。手を拘束されたときの身ごなしは、じゅうぶんに慣れ

ている。無理に踏ん張らずに、倒れて頭を打たないように、すたと尻餅をついた。

お兄さんは船から身を乗り出して海水で手を洗って、僕のズボンで拭いた。おしっこが船べりに掛かったところも拭いて。ズボンもブリーフも海へ投げ捨てた。

「んんっ……？」

文句を言いたいけれど、ボールギャグで封じられてる。

「スクールに着いたら、制服を着せてやる。それまで……」

小父さんは言葉を途切らせて、僕を見下ろした。

「着くまでには、まだ時間があるな。先に、スパルタン・カッタースクールの理念と教育方針について、オリエンテーリングしてやろう」

僕は船底に正座させられた。

訳の分からないところへ、もっと訳の分からないことを言われて、僕はこの人に反発していた。具体的にいうとムカついていた。のが、態度にも表われていたんだと思う。

「生意気な目つきだな。目上の者に逆らうと、どうなるか。追々に教えてやるが。まずは形からだ」

ごついお兄さんが操船室へ行って、大きなハサミを持って戻って来た。それで、僕の服を切り裂いた。刃物が怖いし、無駄な抵抗をしても殴られるだけだろうから、だまって裸にされた。こんなサディスチックなことをされても、反発を覚えるだけで、ちっともときめかない。

寒い……。真冬の海の上で、全裸で風に吹かれて。ボールギャグをガチガチと、かみ締めてしまう。

「ワシは、スパルタン・カッタースクールの校長、小塚宏だ。こいつは、教官の山口」

お兄さんが、うなずく。

「これから、おまえは社会に適合できるまでスパルタン・カッタースクールで暮らす。早ければ数か月で卒業できるし、不適合が続けば何年も矯正教育を受けることになる」

不適合というのは、ホモとかマゾのことだろう。

「スクールの校訓は、『力が正義』だ。それに、『目上は正義』と『世間は正義』が続く」
世の中、そんなに単純じゃないと思うけれど。別の状況で言われたら、根本的にはそうなるんだろうなと思うかもしれない。でも、今は反発が先に立つ。

「自分が正しいと思うことでも、力のある者が違うと言えば違うのだ」

クラスメートのあいだでは、そういった力関係が成り立つかな。

「力とは腕力だけではない。金の力もあれば、権力もある」

そこで『目上』が『力』の上にくるのだと、小塚は言う。『目上』は権力を持っているから、結局は『力』だ。会社なら上司、学校なら先生。けれど『目上』の者がどう言おうと、『世間』には逆らえない。『世間』には法律とかも含まれる。

実際には『世間』が権力なわけだから、突き詰めれば『力』になる。だから、三つの校訓のうち『力』の格助詞だけが『が』になっている。

なんて、もっともらしい説明を聞かされたけど。要約すれば——ワシの言うことに逆らうな。そういうことなんだろう。

ボールギャグが外された。

「ここまでは、分かったな」

「分かります。でも……」

「デモもストもない！」

大声で押さえつけられた。

「質問への返事は、ハイかイエエだけだ。そして、命令にはハイだけだ」

これも……SMの調教で言われそうな台詞。でも、内心での反応は正反対になる。

「もう一度聞くぞ。『力が正義』。分かったな」

「……はい」

そう答えるしかないじゃないか。

「よろしい。それでは、スクールでの生活について、大雑把に説明しておこう」

社会的に不適合な性格の矯正は、集団作業を通じて行なわれる。自給自足の農作業と、

チームワークが要求されるカッターで身体も鍛える。

カッターというのは、左右に何本もあるオールをひとりずつがこぐ——遊園地のボートを五倍くらいに大きくしたやつ。元々は大きな船に積まれていたボートで、マストを立てれば帆で走れることもできるし、大時化でも（正しく操れば）転覆しない。チームワークが取れていないと、オールとオールがぶつかってしまうし、荒海では遭難する。

学校での勉強に相当する部分は、午前と午後に1時間ずつの自習で行なう。朝は農作業だし、夜は反省会があるので、勉強している時間もない。ただし、潮目や天候でカッターを出せないときは、その時間も自習に充てられる。

教科指導の先生もひとりだけいる。のが、プロレスラーみたいな山口だと聞かされて、げんなり。この人はスクールの第一期卒業生で、成績（勉強のことじゃないと思う）優秀だったので教官として残ったそうだ。

学校に比べたら圧倒的に少ない時間しかないうえに、先生もひとりだけ。でも、テストは学校と同じか、もっと厳しい。赤点を取ったら、いろんな罰を受けるそうだ。

「どんな罰かは、いずれ身をもって知るだろう。先輩に聞いたら、たっぷり怖がらせてくれるぞ」

そういう言い方って、教育者じゃないと思う。

その先輩というのは、男子が13人と女子が7人。年齢は僕と同年から、上は20代前半くらいまで、まちまち。

「細かい部分はスクールに着いてから、あらためて説明してやる」

見えてきたぞと、小塚が船の前方を指差した。振り返っただけじゃ船べりが邪魔なので、風がもろに吹き付けて寒いけど膝立ちして、指差す方角を見た。小さな島だけど、波止場があって漁船も何隻か見えた。

けど、船は波止場へは行かずに、島の裏側へ回り込んだ。島の裏側のずっと向こうはアメリカ大陸。なんて馬鹿なことを考える余裕は、やっぱり——裸で手錠を掛けられてるといふ状況に、免疫ができていけるせいだろうか。こんなに寒いのも、まるきり胸がときめか

ないのも初めてだけど。

島のすぐ近くにボートが見えた。何本ものオールでこいでいる。あれが、小塚の言っていたカッターだろう。カッターは2隻。

大きいのは片側にオールが6本。後ろ向きに座ってこいでいるのは、坊主頭ばかり。僕も丸坊主にされるのだろうか。後ろで前向きに立っている2人は、艇長とか監督だろう。遠いから断言できないけど、スポーツ刈りばい。

小さいほうは、オールが3本。後ろに立っている2人は男だけど、こいでいるのは半袖（冬なのに?!）の白い服を着た女の子らしい。

漁船はカッターを遠くに回り込んで、なだらかな斜面になっている砂浜から突き出した小さな栈橋に船を着けた。

栈橋で僕たちを出迎えたのは、意外にも女の人だった。小母さんと言うとビンタされそうだけど、お姉さんと呼ぶのはちょっと——くらいの、ナイスバディで短髪で美人だけど、きつい感じ。会ったことはないけど、SMの女王様というのが第一印象。なのは、服装のせいもある。ボディコンというんだっけ。身体の線がくっきり出てるミニスカートのワンピース。生足にハイヒール。寒くないんだろうか——なんて、全裸にされてる僕が心配することじゃない。

漁船は僕たちを降ろすと、さっさと帰って行った。小塚と年増お姉さんとが並んで、僕はその後ろから山口に追われる形で歩き始める。靴下だけは履いているけど、それが砂に滑って歩きにくい。転んでも手を突けないので、おっかなびっくり。

すぐ間近に迫っている山をすこし上がったところに、木造オンボロ二階建ての横長の建物が、栈橋から見えている。そこが、スクールという強制収容施設だった。

思っていた通り、廃校だった。あちこちが改修されているのは、廊下を歩いているときに気づいた。

階段のところで小塚と山口は別れて、僕と年増お姉さんだけが2階へ。階段の隣の教室には十幾つかのベッドが横向きの3列に並べられていた。出入口は外から鍵が掛かるよう

になっていて、窓は鉄格子でふさがれている。その次の教室にはベッドが六つだけで、整理ダンスとか机とかポータブルテレビなんかも置かれていて、窓に鉄格子がない。その次は最初の教室と同じで、ベッドが少なかった。これって、それぞれが男子生徒、先生とか看守、女子生徒の部屋かな。

三つの教室は素通りして、いちばん奥の、殺風景ながらんとした教室へ入れられた。あるのはパイプ椅子が1脚だけ。そこに年増お姉さんが座った。

「なに突っ立ってるの。ここに正座しなさい」

年増お姉さんが、自分の前の床を指差した。

SMの調教だと、こういうときは……なんていちいち比較するのは、やめよう。調教と違って、ペニスはびくんとも反応しないし、胸がときめくどころかムカつくだけ。

そして、いちいち逆らっても、どうにもならない。ので、素直に正座した。

「あたくしは、下村和子。下村先生と呼びなさい。家政科の指導教官です」

下村先生（心の中で呼び捨てにしていると、ぼろっと口に出ることがあるので、ちゃんと敬称を付けるようにしている。これも、SM調教で覚えた心得だ）が立ち上がって、黒板に向かった。

「それぞれの部屋にも貼り出してあるけど、いちおう説明しておくわね」

黒板に、一日のスケジュールが書かれていった。

月曜～土曜

5 : 0 0 起床

5 : 3 0 課業（農事、家事、営繕）

8 : 0 0 朝食

8 : 3 0 自習

9 : 3 0 カッター（荒天時は自習）

1 2 : 0 0 昼食

1 3 : 0 0 カッター（荒天時は自習）

15:30 自習
17:00 課業（農事、家事）
18:30 夕食
20:00 反省会および懲罰
21:00 自由時間
22:00 就寝

日曜日

5:00 起床
5:30 課業（農事、家事、営繕）
8:00 朝食
9:00 総括反省会および罰直
12:00 昼食
13:00 入浴と自由時間
17:00 課業（農事、家事）
18:30 夕食
20:00 自由時間
22:00 就寝

入浴が週に1度だけというのは不潔だな。それと、5時起きはきつい。なんて思ったら、恐ろしいことを言われた。

「反省会というのはね。ゴメンナサイ、ボクガワルカッタデス。なんて生易しいものじゃないからね。日曜の総括反省会で改めて問題にするまでもないけれど、見過ごせない規律違反への懲罰です」

懲罰ってのは、つまり体罰だろう。

「細かいことは、先輩たちのする通りにして、教官と先輩の命令に素直に従っていれば、じきに分かってくるわ」

下村先生がパイプ椅子に戻ってきて、ごく自然な動作で座ったんだけど。ミニスカートの裾がめくれて、パンティで直に座ってる。のが、脚を組んでるから見えてしまう。

「きみはホモだってね。それじゃ、女性には興味が無いのかな？」

わざと大きな動作で足を組み替えた。一瞬だけど、赤いパンティのサイドがヒモになって蝶結びなのも丸見えになった。

「そんなこと、ないです」

ホモの少年に女性への興味を持たせようという『教育』なんだろうか。

「そうかしら？」

先生が、また立ち上がって。ハイヒールの爪先を僕の膝頭の間に割り込ませて、左右にこねくった。

「口で言われる前に動きなさい」

膝を開けという意味なんだと解釈して、そうすると、股の間に隠しているペニスが露出してしまうけど、とっくに見られているんだし。口で言われる前に動いた。

「ふうん……？」

先生が、ますます近づく。スカートの裾は、僕の頭より上にある。

「これを見ても、エッチな気分にはならないの？」

スカートの裾を持ち上げながら、爪先でペニスをつついた。

アカネさんとは裸でセックスまでしたけれど、あれはSM調教の一環だった。日常生活……これ、日常じゃないと思うけど、とにかく。非SMの場面で、こんなことをされるのは初めてだった。真っ赤なエッチばいパンティと、目の前で動めく白い太もも。自宅謹慎中は、さすがにオナニーも控えていたし。訳の分からない状況へのおびえと怒りとはあるけれど。完全じゃないけれど勃起してしまう。

そしたら、金玉を蹴られた。

「痛い……！」

前へ倒れかけて、先生の脚に顔をすりつけるみたいになった。もっと激しく蹴られた。

「ぐうっ……」

横へ倒れて。起き上がろうとしたら、顔を踏んづけられた。

「目上の人間に非礼をはたらくと、こうなるのよ。覚えておきなさい」

ひどいよ。自分で挑発しておいて。

「もっと罰されないと分からないの？」

「……分かりました。ごめんなさい」

脂汗がにじむのを感じながら、そう答えるしかなかった。

だけど、ほんとうに。どうすれば良かったんだろう。もしも（最大に意志の力を働かせて、暗算でもして）勃起させなかったら、「やっぱり女性には興味が無いのね」なんて言われて、もっと挑発されていたんじゃないかな。これって、SM調教の手口と同じだ。調教だと、どう反応してもそれぞれに別の罰が待ってるんだけど……ここも同じなのかもしれない。でも、これが日常になるなんて我慢できない。

「僕……どうすれば良かったんですか？」

また何か罰を受けるかもしれないけど、質問してしまった。

「目上は正義。あたくしが満足するまで、罰を甘受してればいいの」

なんとなく予測していた答が返ってきた。でも、罰の追加はされなかった。きっと、先生は満足したんだろう。

満足した先生は、やっと手錠をはずしてくれた。そして、ここでの制服を床に放ってくれた。黒い小さな布と、女の子が着るようなセーラー襟のついたワンピースと、白いズック。

黒い布は、着け方が分からなかった。三角ビキニみたいな形だけど、もっと幅が狭くて頂点からヒモが1本出ているだけ。

「反対側の端が、細長い袋状に縫ってあるでしょ。そこにヒモを通しなさい」

そうやって出来た輪の中に片足を通して引き上げて、逆三角形の布で股間を包んでヒモを引っ張って輪を縮めてお尻の割れ目に食い込ませて、そこに布の反対側から出ているヒ

モの端を絡めて折り返して、引っ張りながらヒモが腰を巻くように調節して、ヒモの端を絡めて止める。言葉にするとややこしいけど、実際には簡単に出来た。これ、黒猫フンドシというんだそうだ。

ええと……簡単に出来たといったけど、それは締め方のこと。収め方は苦労した。平常時（よりも縮かんでる）のペニスを下向きに包もうとすると、布の両側から玉がはみ出してしまった。ペニスを上向きにして玉も引っ張り上げて、布は引き下げて、ぎりぎりで収まった。腰ヒモが一直線にならず浅いV字形になって、すごくきわどいエッチな形。だけど、エッチ気分は皆無。

それから、半袖のワンピースを着た。ほんとに女子用だ。膝上30センチくらいの超ミニスカート。お飾りのベルトが背中に縫い付けられていて、前で締める。ワンピースの襟と袖には青い2本のラインが入ってる。どこかの私立女子校の夏服っぽいけど……今は真冬。それと、バンドと裾に小さなスナップボタンが付けられている。

「そのままにしておきなさい。すぐに、使い方はわかるから」だそうだ。

最後に靴下を脱いだ。生徒は冬でも素足。学校の上履きにししか見えないズックを与えられたけど、これは外でしか履けない。廊下では裸足。足の甲を締めるゴムバンドが赤いからワンピースの青ラインと色違いで、なかなかおシャレっぽい。もちろん、女の子が着るときの話だけど。

女装させられて。もうわかっていたけど、ちっともエッチ気分にもならないし、フンドシの中で上向きに収めてるペニスも縮かんだまま。

「もうぼつぼつカッター訓練が終わるわね。みんなに紹介してあげるから、ついて来なさい」

ついて来るのが当然みたいに、先生はさっさと教室を出て行った。仕方ないので、後を追いかける。

校舎から出て、短い山道を下りる。薄っぺらいワンピース一枚でも、全裸に比べればずっと暖かい。その対比で、下半身がスウスウして冷たい。女の子って大変なんだなと、思

ったりする——くらいには、人心地を取り戻してた。のは、束の間だった。

まだ沖合にいた2隻のカッターは僕たちの姿を見ると、海岸へ向きを変えて、オールから波しぶきが飛ぶほどの勢いで、こぎ始めた。

2. オトコ女オンナ男

僕たちが棧橋に着いてすぐ、カッターもこぎ寄せてきた。

大小のカッターが棧橋の左右に分かれて止まって。後ろに立っていた年かさの男の人がひとりずつ棧橋に上がって、舟の前後から投げられたロープを棧橋に結び付けてカッターを固定した。

大きなカッターからは坊主頭の男子が、小さなカッターからはオカッパと三つ編みの女子が上がってきた。女子は、僕と同じセーラー襟のミニワンピース。超ミニだけど、黒猫フンドシの下端が見えている人もいたし、股下5センチくらいの子もいる。既制服のサイズと個人の体格の関係だろう。男子は白の菜っ葉服というのかな。頭からかぶる、だぶだぶの上衣とズボン。ひとりだけズボンを履いてない。下は黒い六尺フンドシだ。よく見ると、女子もひとりだけお尻を出している。ワンピースの裾を折り返してまくり上げ、腰のベルトに留めている。そうか、そのためのスナッフなんだと寒心してしまった。

だけど。なんで、そんな格好をしてる（させられてる）んだろう。反省会の処罰なんだろうか。男子のほうは、僕より3コくらいは年上みたいだから、まだいい（こともない）けど、女子は断トツ最年少に見えるから、僕と同年くらい。痛々しい。

なんて考えてるうちに。

「集合。整列！」

最後に男子のカッターから降りた男の人が、僕の横まで来て号令を掛けると、男子も女子も駆け足で集まってきた。男子は2列、女子は1列の横隊で左右に並んだ。

「気を一つケッ。整列ヤスメ」

ぴしぴしと。学校の組体操でも、ここまでそろわないよってくらいに整然とした動作。

「皆に紹介する。こいつが、本日入所した畑山薫だ。男だがオカマなので、女の格好をさせている。本人が男だと自覚するまで、女子として扱う。当然、寝起きも女子の部屋だ」

男子も女子も無表情。とくに女子。男子と一緒に部屋で寝ろと言われても、まったくざわつかない。薄気味悪い。

「では、おまえたちも自己紹介しろ」

(名前の漢字は後で知ったんだけど、最初から漢字表記にしとく)

「柴野淳一」

「河野寛太」

「元田肇」

次々に名乗られても覚えきれない。それよりも並び順が気になった。背の高さじゃないし、年齢順でもなさそう。河野寛太くんは、僕よりちょっと上くらいだけど、前列の右端に並んでる高草壮太さんは完全にオトナ。ズボンを履いてない人は鈴木拓馬さんで、後列の右から2番目。僕より3コくらい上かな。そして、後列の右端は。

「正木翔子」

え……？ 翔子？ 坊主頭だから、優しい感じのお兄さんに見えるけど、声も女の人。どうして、男子の列に並んでいて、男子の服装をしてるんだろう。

「島村綾子」

「中川京子」

女子も次々に名乗ったので、疑問は置き去り。

「最初にも言ったが、こいつは男のくせに男に抱かれたがるオカマだ。オンナ男だな。オトコ女の翔子と好一对だ」

あ、それで翔子さんは男の格好をさせられてるんだと納得（しないけど）した。

「俺は林康夫だ。営農が担当だが、最年長なので副校長を務めている」

小塚校長よりもかなり年配だけど、これだけ歳が離れてると、四十代なのか五十代なのかも見当がつかない。(とくに女子)生徒が寒そうな服装なのに対して、この人たちはジャージの上からジャンパーを着ている。

「俺は大田原幸雄。カッターの指導だ」

三十代かな。

「川上道夫。無任所の助手だ」

プロレスラーみたいな山口教官と歳も体格も同じくらいかな。

「私は有島大悟。教科指導だが、ふだんは本土の連絡事務所にいる」

教官の名前と顔は、真剣に覚えた。目上の人に失礼があったら、ここでは罰を食らうだろうから。みんなスポーツ刈りなので、顔よりも年齢と体格が目安。

林副校長が、僕の目の前に立った。

「薫に聞くぞ。女の格好を皆に見られて、うれしいか。それとも、男の格好をしたいか？」

「うれしくないです」

とは、すぐに答えられたけど。

「あの……男の格好で、坊主頭も含むんですか？」

「当然だ」

坊主頭なんてイヤだ。でも、みんながしてる。そういう学校もあるんだし。みんなと違わうってことは、それだけで苛められることが多い。

「……男の格好をしたいです」

かなり、ためらいがあったけど。

「よし、分かった」

林副校長は、翔子さんを振り返った。

「お前は、どうだ。女の格好に戻りたいか？」

「男にこびを売るなんて、死んでもできません」

なんか答えがずれてるなと思ったけど。林副校長の言葉に、僕は耳を疑った。

「ふん。素直に股を開くくせに、まだそんなことを言っているのか」

「……抵抗しても殴られるだけだから」

翔子さんは唇をかんでうつむいた。

どうということだろう。言葉を単純に解釈すれば——この施設では、女子は男子にこびて生きなくちゃならなくて。レイプされても逆らったら、暴力を振るわれる。そんなことって、あるんだろうか。だって、ここは（かなり怪しいけど）教育施設のはずだよ。

「男の格好で男と一緒に居たければ、新入生をぶちのめせ」

また耳を疑ってるうちに、林副校長は僕に向き直った。

「おまえも男の格好になりたければ、祥子をぶちのめせ。女に負けるようなやつは男じゃない」

「……………？」

「男になりたい者同士のタイマンだ。ギブアップは許さん。どちらかが気絶するまで、やれ。まあ、力量差がありすぎたら、TKOにするがな」

副校長が唇だけで薄く笑った。なんとなく戸坂先生を連想した。

「なにをしてる。さっさと裸にならんか」

怒鳴られて、ますます訳が分からなくなった。

「古代ギリシャのパンクラチオンは、全裸で闘ったそうよ」

ずっと後ろに控えていた下村先生が、説明してくれた。楽しそうな声だった。この人、サディスティンかな。

「ここは現代の日本だから、フンドシだけは着けていてもいいわよ。フルチンになりたいなら止めないけど」

翔子さんが服を脱ぎ始めた。諦めきっているような無表情。

菜っ葉服を脱いだら、ポインと形容できる乳房が現われた。女性だから当然だけど。坊主頭と女性の裸体って、すごく違和感がある。

丸坊主よりも、もっと気になることがあった。翔子さんの肩にも背中にもお尻にも、それから乳房や腹——全身に、細長い筋がうねくっている。間違い無く、ムチの痕だ。濃く赤黒いのは最近、薄く青いのは1週間以上前のものだ。

ムチ打ちなんて野蛮な懲罰が、ここでは行なわれているのだろうか。SMで何度もムチ打たれてきた僕が驚くのもおかしいけど、あれは合意だった（かなという疑問は無視）から、まったく別の話だ。

だけど、今は当面の問題に対処しなくちゃ。相手が脱ぐんだから仕方ないなと諦めて、僕もワンピースを脱いだ。頭からすっぽり抜くだけで、フンドシー丁の裸。初対面の人たちに見られて羞ずかしい——よりも、とにかく寒い。船の上で潮風に吹きまわられていたときよりはマシなはずだけど、今のほうが寒く感じる。それだけ、心の働きが戻ってきてるんだろう。

翔子さんもズボンまで脱いでフンドシー丁。右手でフンドシの前を、左手で乳房を隠して、突っ立ってる。全身に鳥肌。は、僕も同じ。

「なんだ、その格好は。男なら胸を張れ。特に翔子は、せっかく胸が腫れているんだからな」

くすくす笑いが女子の列から聞こえた。男子は、黙ってニヤニヤしている。

「まあ、いい。あまり時間が無い」

副校長が山の方角を見やった。校舎の上に掛けてある大きな時計が、3時20分を指している。そうか、3時半からは自習タイムだ。

「さっさとケリを着けろ」

んなこと言われても。女の子をぶちのめすなんて、僕には出来ない。縛ってムチでたたいたり犯したりは、できるというか、してみたいけど。でも、今じゃない。

なんて、ためらっていると。翔子さんが身をかがめて、両手を前に突き出した。アマチュアレスリングのファイティングポーズばい。

僕は、まるきり戦意が湧かない。女性をぶちのめすのもイヤだけど。僕にしても翔子さ

んにしても、勝つことにメリットがあるのだろうか。超ミニのワンピースは羞ずかしいけれど、丸坊主もイヤだ。翔子さんだって、ほんとに男の格好をしたいんだろうか。今でも、殴られるのがイヤで男子たちにレイプされてるみたいなことを言ってたし。僕が女子の部屋で寝起きさせられるのと同じで、翔さんは男子の部屋で——もしかして、毎晩レイプされてるのだとしたら、ほんとは女の子に戻りたいんじゃないかな。

よし、決めた。翔さんをぶちのめしてあげよう。丸坊主にはなりたくないけれど。というのが、まったくのウヌボレだと、すぐに分からされた。

だいたい。僕が殴ったくらいで、相手が気絶するとも思えないけど。とにかく。姿勢を低くして、頭突きをかますつもりで突っ込んだ——ら、上からおおいかぶさる感じで腰に抱きつかれて、そのまま押しつぶされた。

翔さんは、僕より3コか4コ年上だと思う。大柄じゃないけど、僕は平均身長未満で体重も軽い。上から押さえ込まれて、さらに身を縮めるような感じで締めつけられると、振りほどけない。

しばらくジタバタしていると、副校長が近寄ってきて。

「きゃあっ……」

翔さんが、横に転がった。お腹を押さえて、うずくまった。横から蹴られたんだ。

「いちおう、翔子のTKO勝ちだ」

脇腹に鈍い痛みが走った。うずくまるほどじゃないけど、僕も脇腹を蹴られた。

「まったく、なよなよしたオカマだ。女子は、今日の自習を自由時間にしてやる。新入生と、たっぷり親睦してやれ」

負けたのだから裸のまま立っているとわかれて、女子の列の右端に並ばされた。

翔さんは立ち上がったけど、列に戻らずにその場で整列ヤスメをした。林副校長が、その前に立った。

「オンナ男に勝ったくらいで、いい気になるなよ。しかも、ぶちのめしたわけじゃない」

言いながら両手を伸ばして、翔さんの乳房をつかんだ。翔さんは眉毛一本も動かさ

ない。

「返事をしろ」

しかりつけながら、双つの乳房を内側にひねった。

「いい気になんか、なっていません。私は出来損ないのオトコ女です」

棒読み。そういうふうに言えと教え込まれて、でも内心では激しく反発している。それが、初対面の僕にでも分かるくらいだから。林副校長は、怒ったんだろうな。

「いいや。まだ分かっていない。これから分かせてやる」

林副校長は右手で乳首を掴んで引っ張って、翔子さんを男子の列の前に立たせた。

「寛太。おまえは翔子より二つ下だったな。年上のこいつに勝てるか？」

寛太くんは（僕はオンナ男だから除外して）男子の最年少だと思う。僕よりもちょっとだけ大きいけど、僕と同じできゃしゃな印象。その彼が、自信満々に答えた。

「あたりまえです。完膚なきまでにぶちのめせます」

「よし。翔子に分かせてやれ」

寛太くんが列から進み出て、ぱぱっとフンドシー丁になった。

寛太くんがボクシングのファイティングポーズを取ると、翔子さんもアマチュアレスリングの構え。

寛太くんが、いきなり顔面を狙ってパンチを繰り出した。翔子さんは両手を引きつけてガードする。寛太くんが腕を引き戻しながらサイドステップ。踏み込んで、アッパーカットみたいなのを翔子さんのお腹にたき込んだ。

「ぐぶっ……」

うめいて、翔子さんはいつそう背中を丸めて防御しようとする。顔面のガードが下がった。すかさず、寛太くんが横っ面をビンタした。

翔子さんは顔を護ろうとはせず、両手でお腹をかかえて、低い姿勢で突進した。寛太くんは軽々とかわして回り込んで、後ろからお尻を蹴った。

「あっ……」

翔子さんは前へつんのめって、四つんばいになる。寛太くんが蹴り上げる。

「おらあああっ！」

ぼぐん！

離れて見ている僕にまで聞こえる大きな音。

翔子さんは両手で股間を押さえて、うずくまった。お尻を高く突き上げた、その場面だけを切り取ると、かなりエッチなポーズ。

完全に勝負あった。でも、寛太くんは容赦しない。後ろからおおいかぶさって、両手を脇の下へまわして乳房をつかんで、翔子さんをひっくり返した。馬乗りになって、翔子さんの両腕を膝で押さえこんでから、バシンバシンと、ほっぺじゃなくて乳房に両手でビンタ。

翔子さんは歯を食い縛って、寛太くんをにらみ上げている。

「よーし、勝負あった」

林副校長が宣言したのは、10発以上の乳房ビンタの後だった。

けれど、寛太くんは馬乗りのまま。

「林教官殿。こいつ、まだ反抗的な目つきをしています。もっと分かせてやっていいですか？」

下村先生は教えてくれなかったけど、先生のごことは、副校長も含めて『教官殿』と呼ぶらしい。ちゃんと覚えておかなきゃ。

「分かせてやれ。ほら」

林副校長がジャージの尻ポケットから小さな正方形のパッケージを取り出して、寛太くんに渡した。僕には、じゅうぶんに見覚えのある品——コンドームだった。腕力だけでなく、セックスでも男女の違いを分らせる。そういうことだろう。

でも、こんなのって、教育でも指導でもない。ただのSM……とも違うと思う。その理由は分からないけれど。

「他にも、翔子に分かせてやりたいやつはいるか？」

林副校長がとんでもないことを言うと、6人が進み出た。

「ふん。3掛ける2か。時間が無いから、寛太が終わったら、3人ずつで掛かれ」

「はいッ」

6人が一斉に返事をした。

そのあいだに、寛太くんは六尺フンドシを脱いでコンドームを装着して、翔子さんの黒猫フンドシもむしり取っていた。

翔子さんは抵抗しない。あお向けに転がされたまま天をにらんで……涙を流している。

とんでもないことが始まっているのに、誰もが平然としている。んじゃなくて。男子は、数人を除いてニヤニヤしてる。ズボンを履いていない拓馬さんだけは、こぶしを握り締めて唇をかんで、地面をにらみつけている。女子も、同性が犯されようとしてるのに、面白がっている表情。由紀恵というお姉さんだけは無表情なんだけど、嫌悪感を押し殺してるようにも見えた。

「脚を開けよ」

寛太くんの命令に、翔子さんは素直に従った。

「膝を立てろ。いちいち言われないと出来ないのか」

涙を流しながら、言われたとおりにする翔子さん。イヤでたまらないけど、逆らったら暴力を振るわれるので従っている。まあ、そうだよ。好きでもない男に犯されて喜ぶのはマゾ女くらい……いや、それは違う。僕は、サディストの小父さんたちにムチでたたかれたり、もっとひどいこともされたし、アナルだって何十回と犯された、じゃなくて犯してもらった。そう、犯してもらったんだ。小父さんたちを好きだと思ったことは（あまり）ないけど、されるのはイヤじゃなかった。

でも、翔子さんはいやがってる。翔子さんはオトコ女だって、言われてた。それって、レズのことかな。レズの女性なら、男性に嫌悪を感じて当然だろう。その嫌悪を矯正するために、男に犯させる。快感調教ってやつだと考えると、この異常なシチュエーションを説明できる……とも思えないけど、他に合理的な(?)説明は思いつかない。

寛太くんが正常位で挿入して。

「後がつかえてるぞ」

「どうせ、おまえの短小包茎じゃ満足させられっこないんだから、さっさと済ませろ」

ちらっとしか見てない(翔子さんに気を取られてた)けど、たしかに戸坂先生のよりは、かなり小さい。でも、僕の5割増しくらいはあった。僕はなんて言われるんだろうかと、今からユウウツになっちゃう。翔子さんの涙を見てると、そんなことを心配している自分が恥ずかしくなるけど。

セックスが始まった直後に、小塚校長と山口教官が学校から下りて来た。

「また、翔子への特別補習か」

「はい。男にこびるのが嫌だとか、分をわきまえないものですから」

答えている林副校長を見て、気がついた。この人のジャージズボン、まったく膨らんでいない。六尺フンドシを締め込んでるにしても、すこしくらいは盛り上がると思う。

「いや、大いに結構。徹底的に仕付けてやれ」

小塚校長は(にこやかに!)うなづいた。これが補習だなんて、本気なんだろうか。SMの調教に使う口実って感じじゃない。戸坂先生が言うときには、なんだかねちっこいし、本人が楽しんでるなって、なんとなく分かるけど——これには、そんな雰囲気欠けてる。

一番偉い人に見られて張り切ったんだろうか。寛太くんが目一杯の荒腰を使い始めた。

ぱんぱんぱんぱん……寒風の吹く砂浜に乾いた音が響く。

「うっ、うっ、うっ……」

お腹の空気が押し出されて声になっている。うめき声かもしれない。とにかく、あえぎ声じゃない。快感調教からは程遠い、寒々とした光景だった。

その動きも数分で終わった。

寛太くんが立ち上がると、翔子さんの隣に壮太さんが寝転がった。たぶん生徒の中で最年長の人。裸で、コンドームはしっかり膨らんでそびえ立っている。

「さっさと股がって、自分で挿れろよ」

壮太さんが横柄な口調で命令する。翔子さんは身を起こして、正面を向いて壮太さんを股いだ。もう、涙は流していない。慣れたんじゃないなくて、悲しみや悔しさのどん底を突き抜けたって印象だ。

「こら！」

横で眺めていた川上教官が、翔子さんのお尻を平たい板で、パアンとたたいた。

「黙って男を股ぐやつがあるか」

「申し訳ありません……失礼します」

翔子さんの返事の後半は、足の下にいる壮太さんに向かってだった。

何事もなかったみたいに腰を落として膝を突いて、後ろからまわした手で勃起しているペニスの根本を握った。背筋をぴんと伸ばして腰を沈めていって、ペニスが股間に埋もれた。それから、翔子さんは四つんばいになった。

山重明夫さんが、翔子さんの前で相撲のソソキの姿勢になって、腰を突き出すと、翔子さんがそれをくわえた。

「たっぷりなめとけよ。痛い思いをするのは、おまえだからな」

翔子さんが頭を前後に動かして、言われた通りにたっぷりとなめる。

そのままフェラチオを続けさせるんじゃないなくて、30秒ほどで立ち上がって、明夫さんは後ろへまわった。中腰になって、両手で翔子さんの腰をつかんで——無造作に、アナルへ突っ込んだ。

「くっ……」

翔子さんが、微かにうめいた。慣れてるんだろう。ちっとも痛そうじゃない。けれど、それは肉体に限ってのこと。歯を食い縛って屈辱に耐えている。

でも、まだ続きがあるのを、僕も翔子さんも知っている。

翔子さんの前に、たしか原正輝さんだっけ、筋肉のごつい20歳くらいの人が仁王立ち。

「髪の毛が無いと、やりづらいんだよ」

両手で坊主頭を持ち上げて、フェラチオをさせた。この人だけは、コンドームを着けていない。

両手が宙に浮いたので、上体を支えるために翔子さんは相手の腰に抱きついた。のを、正輝さんがひっぺがして、腰の両側につかまらせた。抱きつかれたらピストン運動ができないからだろう。何度もこういうことをされている（んだらう）翔子さんも、それは分かっている、せめてもの抵抗なんだろうと思う。

3人が動き始めた。壮太さんが下から突き上げ、明夫さんが腰を翔子さんのお尻に打ち付け、正輝さんが容赦なく喉奥までペニスを突き立てる。

翔子さんは女性として平均的な背丈だけど、男3人に挟まれて、もみ苦茶にされて、嵐の中の難破船さながら。

うらやましいな。だって、僕には穴が二つしかないから、3人同時は不可能。なんて思っただけで、すぐ反省した。翔子さんは、どんな意味でも、この状況を楽しんでいない。快樂を得ていない。僕がムチ打たれて泣き叫びながら、胸の奥がきゅうんとなるのとは、根本的に異なっている。

「林先生。まだ、しばらく掛かりそうですか？」

僕の左横（正面から見て右端）で、教え子が男子生徒に輪姦されている様子を平然と眺めていた下村教官が、不意に口を開いた。

「ん……ああ。3穴は女にとっては極楽か地獄のどちらかだが、男の側は動きづらくて意外と肉体的快樂に乏しいからな。次の組が終わるまでに、まだ15分は掛かるかな」

「でしたら、薫にも、もう少し分かせてやりたいんですけど。よろしいかしら」

「おおいに結構。どんどん、やってください」

「では……薫、友美。前に出なさい」

折り返したスカートの裾をベルトに留めて黒猫フンドシを丸出しにしている子が、おどおどした様子で列から進み出た。僕も、その横に並ばされた。

下村先生に命令されて、友美さんもワンピースを脱いだ。翔子さんの半分もないくらい

の膨らみを隠そうとはしないけれど、羞ずかしそうにしてる。

「二人は同い年ね。タイマンを張りなさい。負けたほうが、次の総括反省会まで下脱ぎです。友美が勝てば、別にご褒美をあげる。薫は、いちおうはチンポを付けてるんだから、勝って当然ね」

翔子さんが犯されてるすぐ横で、僕と友美さんは向かい合った。

「友美。そいつを母親の再婚相手だと思いなさい。おまえの処女を奪った憎い男よ」

修羅場の中にもうひとつの修羅が、さらっと放り込まれた。だけど、被害者はこの子だ。どうして、ここへ入れられたんだろう。

「だから、あいつにしてやりたかったことを、そいつにしてやっても構わないわよ。私も校長先生も許可します」

友美さんがコクンとうなずいて。

「わああああっ」

いきなりつかみかかってきた。へろへろって感じだった。抱き止める形になって。こんなふうにならぬと女の子と肌と肌を合わせるのは初めてだった（年上のアヤネさんとはセックスまでしてるけど）。女の子って、こんなときでも、ふにやっとしてて可愛い。こんな可愛い弱々しい子をぶちのめすなんて、僕にはできない。縛ってムチでたたいて泣かせて犯してやりたいとは思ったりするけど——なんて雑念にかまけてると。

股間で激痛が爆発した。

「……！！」

股間を両手で押さえて、もん絶。地面に膝と頭を着けて、金玉が釣り上がってくる重たい痛みを苦しむ。

「まだよ。弱ったやつは、徹底的に痛めつけてやりなさい。力が正義なのよ」

5秒くらいは、何も起きなかった。

「ぶちのめしてやりなさい。そんな弱気だから、万年ビリのままなのよ」

じゃりっと砂を踏む音が聞こえて。

脇腹に蹴りを入れられた。

「痛いッ……」

それからは、キックの連続。腕を蹴られお尻を何発も蹴られ、真後ろからまた金玉を蹴られた。

だけど、泣きを入れたくなかった。僕よりもきゃしゃな同い年の女の子に降参なんかしたくなかったし、これもTKO以外は降参無しのルールだと思っていたから。三発目を食らわないように股間を両手でガードして、あとはやられ放題。

「もういいわ。翔子は出来損ないのオトコ女だけど、薫は女にも負ける、ただのクズね」

下村教官がTKOを宣告してくれなければ、半殺しくらいにはされてたと思う。

もう、立ち上がってケンケンする気力もなくて、翔子さんへの特別補習が終わるまで、僕は砂浜にうずくまっていた。

「いつまで寝てるの。いい加減で立ちなさい」

痛みはだいぶ治まっていたので、立ち上がった。海のほうで何か動いているので、そちらを見ると——翔子さんが腰まで浸かっていた。汚された部分を洗っている。のは分かるけど、真冬の海だよ。洗いながら、翔子さんは身体を震わせている。

これからは僕も、日常的にこんな目に遇わされるんだろう。とんでもない所へ放り込まれた。

裸で闘わされたり、公然と女の子がレイプされたり、真冬の海に強制的（に決まってる）に入らされたり。ものすごくSMっぽいシチュエーションだけど、実際はまったく違うと思う。じゃあ何だと聞かれても答えられないけど。

翔子さんが波打ち際まで戻ってきた。そうするように言われてるんだろう。両手はだらりと垂らして、前を隠していない。ので、気がついた。淫毛がなかった。無い訳じゃない。うっすらと黒ずんでいる。そつてから1週間とそこかな。これまでの経験で、目利きには自信がある。ちっとも威張れたことじゃないけど。

翔子さんはぬれた身体を拭くことも許されずにズボンを履いて菜っ葉服を着て。僕も、

超ミニのワンピースを着ることを許された。自分の手でスカートを折り返して黒猫フンドシもお尻も丸出しにして、スカートの裾を腰のベルトにスナップボタンで留めさせられた。だけでなく。

「どうにも見苦しいわね」

下村教官が、僕の股間を指差した。布の幅が狭いから、両側から玉がはみ出していた。

「いっそ、フンドシなんか要らないわね。男でも女でもないただのクズなんだから、フンドシなんて生意気よ」

ほんとうにフンドシを取り上げられてしまった。そして。この施設に軟禁されているあいだ、僕は下着を与えてもらえなかった。

3. 新入生への仕付け

2列縦隊の先頭を歩かされて、学校へ戻った。僕の右側は下脱ぎの鈴永拓馬さんで、後ろが友美さん。その横は翔子さん（つまり、拓馬さんの後ろ）。男女1列ずつで、序列が下の者が前という並び順らしい。

校庭で解散したのが午後4時10分。5時まででは自習時間だけど、女子班は教官の許可が出ているので、新入生つまり僕との親睦会。『たっぷり』なんて形容動詞がくっついてるくらいだから、実質は釣るし上げとかイジメ。

ベッドだけが並んでいて窓に鉄格子のはめられた教室に連れ込まれて。

何事も隠さないという意味で、全裸にされた。床に正座させられたんだけど、開けっ広げに語るために、脚を直角に開かされた。こういうへ理屈の理由付けは戸坂先生も好きだったな——ちらっと思い出した。

萎縮したペニスも玉袋も女子の目にさらされる。そして、先輩たちに逆らいません抵抗しませんという証に両手は後ろ。反対側の肘をつかんで、親睦会が終わるまで絶対に手を

離すなと厳命された。

靴箱へ入れないで持ってきたズックを片手に、6人の女子が僕を取り囲んだ。生徒の自給なので、下村教官も立ち会っていない。

ホモだと自覚したのは何歳のときだったのか、オナニーはするのか、アナルセックスは経験があるのか、女性とはどうなのか、マゾなんだから痛いことをされるのが好きなんだろうとか——そんなことばかり質問された。ばれたときに怖いからウソはつけない。さらっと流そうとしたり、心の奥底の本音は隠しておこうとしたんだけど。女の子って、勘が鋭い。

「きれい事を言ってんじゃねえよ」

「ごまかすな」

「何も感じなかったわけ、ないでしょ。ちゃんとおっ勃ってたんじゃないの？」

ズックで（手加減無し）ビンタされたり、肩をたたかれたり。足に履き直したズックで股間を踏んづけられたり。挙げ句は、爪先をお腹に蹴り入れられた。後ろに組んでいた手をほどいてお腹を抱え込んだら、姿勢を崩した罰で——床に大の字に押しさえつけられて、口にズックをねじ込まれて、金玉をぐりぐりと踏みにじられた。ものすごく痛くて、とうとう泣いてしまったけど。許してもらえなかった。しゃべれるようになると、大の字ハリツケにされたまま尋問が続けられた。

これまでで一番つらくて惨めだった。SM調教では、もっと痛いことをされたこともあったけれど。痛くされてもいい（むしろ、されたい）と願っているときと、そうでないときとでは、感じ方が違う。惨めだと感じて、そこに甘い感情が伴うのと、怒りや悔しさが込み上げるのとは、方向が真反対だ。

僕は打ちのめされて、何もかもを正直に告白してしまった。体育の先生（名前には関心が無かったらしく、追及されなかった）との出会いや、そのプレイについては、信じてもらえたというか、あきれられたというか。真実だと思ってくれたけれど。

僕は特に男性とセックスがしたいわけじゃないし、マゾ一方でもない。とにかく（健康

な男の子なら当然だけど) エッチなことに興味があつて、強い相手には支配されて虐められて当然だし、弱い相手は支配して虐めてやりたくなる。体力とか年齢とかで、強い相手というのがオトナの男性で、弱い相手は同年齢以下の女の子になる。ただそれだけのこと——という僕の想いは、信じてもらえなかった。

「小塚の受け売りじゃねえか。どうせあいつの耳に入ると計算ずくのご機嫌取りかよ」

そう言って、ズックを履いた足でドスンとお腹を踏んづけたのは中川京子さん。まるでスケバンみたいな口調——も当然で、後で『本物』だと教えられた。対立グループとのケンカで3人に重傷を負わせたそうだ。

「おまえみたいな無節操なやつには、虫酸が走るんだよ」

「違う。僕は、あんな人とは……」 どこが違うんだろう。

強い人に支配されて弱い子は虐めたいというのと『力が正義』とは、同じように思える。でも、それじゃ何故……小塚校長の言葉に反発を感じるのだろうか。

いつまでも尋問は続きそうだったが、5時のチャイムに救われた (のかな?)。

課業開始の時刻。5人の女子がばたばたと教室から出て行った。残っているのは僕と、最年長の島村綾子さん。オカッパというより、おとなびたボブカットかな。この人が、女子班のリーダーらしい。

「おまえがまともな男になる手伝いをしてやるよ」

裏庭へ連れて行かれた。蓋のついたコンクリート製の水槽があつた。島の簡易水道は圧力が低いので、学校があつた頃は加圧ポンプで麓から送水されていたけど、今では壊れている。誰かがくんで来なければならない。朝夕の作業時間に、男子3人と女子1人が当番で担当していた。これからは女子側の当番をずっと僕に割り当てると、綾子さんが宣言した。

「それは、ないだろう」

「男子全員を敵にまわすってのか」

当番の男子から、猛烈なクレームがついた。柴野淳一さんと大森豊さん。

「うるさいわね。こいつにだって口はついてるじゃない」

「そういう問題じゃねえよ」

「文句があるなら、校長へ言ってよ。校長の差し金なんだから」

「へ……？」

「男に戻りたいって思わせるための逆療法だってさ、よく分からないけど」

「まあ、校長の命令なら、仕方ないけど」

「言い忘れてたけど、アナルセックスも経験済みよ、こいつ」

「女のケツ穴だって、俺は気色悪いぜ」

「知らないわよ、そんなこと」

意味不明なようできて、すごく嫌な予感のする会話だ。

「言い合っても時間の無駄か。さっさと終わらせようぜ」

年かさの淳一さんが議論を打ち切った。

僕は10個の空バケツを重ねて釣るした天びん棒を担がされた。男子2人は天びん棒だけを持っている。坂道を下りながら、淳一さんが作業の説明をしてくれた。

バケツは40リットルだけど満杯にしたらこぼれるので、30リットルだけ入れる。それでも天びん棒の前後で60リットル。スーパーで売っているお米が5キログラムだから、12個分。ていうか、自分の体重より15キログラムも重たい。これを担いで坂道を上がるのは重労働だと思う。3人が1回ずつ運んで180リットル。雑用水（洗濯と風呂）は山から引いた湧き水を使うけど、それでも飲料水や台所で1人あたり1日に50リットルは使うそうだから、教官と生徒合わせると1300リットル。朝晩4往復ずつ。森友美さんあたりだと、ぶっ倒れるんじゃないかな。

「ふだんは女子を水くみ場に残して、いい思いをさせてくれる見返りに、俺たちで女子の分も運んでやるんだがな。おまえは、ちゃんと60リットルずつ運べよ」

女子は、男子が運んでいる間も蛇口を開けばなしにして、次に運ぶ水を貯めておく役割なんだそうだ。だから、バケツが多い。

あ、分かってきた。「口はついてる」って綾子さんの言葉と「いい思い」を重ねると……
フェラチオなんか、嫌だよ。

「ああ、そうだ。おまえ、スカートを下ろせ」

廃村の中に残っている水くみ場には、たまに人が来ることもあるそうだ。フルチンを目撃されると、やっぱりまずいだろうな。

廃村の中の、共同で使う井戸があった場所に、わりと新しい水栓が立っていた。蛇口をひねると家庭の水道と同じくらい勢いよく水が出るけど——それでも、30リットル貯まるのに5分くらいかかる。バケツ2杯貯まるごとに1人ずつ担いで出発して。

「おまえは、スペアのバケツを40リットルの満杯にしてから、自分のを運べ」

だもんで、僕が水くみ場を離れたのは、着いてから半時間は経ってからだった。

1回運んだだけで、肩は痛くなるし脚がガクガクしてきた。コンクリート造りの貯水槽に水を流し込んで、へろへろになって水くみ場へ戻って。空のバケツを満杯にしたら、2回目を運び終えた淳一さんが戻って来て、それをかつさらって行った。残された空バケツに水を入れてたら豊さんが戻って来て、それも取られた。殴られるのもフェラチオも嫌だったから、豊さんが置いていったバケツにに水を貯めて2回目を運んだ。

空バケツを持って山道を下っているところで、4往復目の淳一さんと出会った。

「今からじゃ間に合わない。引き返せ」

淳一さんのバケツを二つとも担がされて、学校まで戻った。

「これは、俺の分だからな」

淳一さんと豊さんはノルマの4往復を果たして、僕が半分の2往復だけという理不尽な勘定にされてしまった。『目上は正義』だから、文句を言っちゃいけないだろうな。

真冬に薄い服1枚（しかも下半身は丸出し）の作業だったけど、震えるほど寒くはなかった。それだけ重労働だった。

疲れ果てて食欲も湧かなかったけど、団体行動に自分勝手は許されない。午後6時半に

は、みんなと一緒に食堂へ行った。給食の調理室にいちばん近い教室。ここは長机とパイプ椅子だけで、窓の鉄格子は無かった。

それぞれがプラスチックのトレーとアルミの食器を持って、教室の後ろに並べられた御飯とおかずと汁とを女子の当番によそってもらおう。最初は教官たち。

「もうちょっと飯を多くしろ」

「あたくしは少な目でいいわ」

教官は好き勝手に注文できるけど、生徒は決められた分量。一律じゃなくて、水くみと炊仕事は大盛とか、その日の評価で増減があったりとか、林副校長が1人ずつ指示している。

長机に4人ずつが向かい合って座って。まだ食べてはいけない。

元田肇さんと瀬戸和成さんが、拓馬さんと翔子さんの皿から、ご飯とおかずを半分ずつ、自分の皿へ移した。

「今日から、おまえが女子のビリだからね」

中川京子さんが僕の後ろから、御飯とおかずを半分取った。成績ビリの者はトップに半分を献上する決まりらしい。男子は人数が多いから、2人ずつ。刑務所の唯一の楽しみは食事だって聞いたことがあるけど、その唯一の楽しみを使って上下を競わせるなんて、この施設は刑務所以下だ。

「よろしい。では、冥目。合掌」

まわりを見習って、僕もお箸を親指と人差し指の間で水平に持って、目をつむった。

「いただきます」

校長の声に全員で唱和して。生徒たちは猛スピードで食べ始めた。おしゃべりをする者はいない。禁じられているのかもしれない。教官たちは、ゆっくりと食べている。

食べ終わった者も勝手に退出せず、その場で背筋を伸ばして両手をそろえて待っている。

食事時間になってから30分。実際に食べ始めて15分くらいでチャイムが鳴った。端のテーブルから順に4人ずつ立ち上がって、トレーとお皿を決められた場所へ積み重ねて

いく。横の床にバケツが置かれているけど——そこへ残飯を入れたのは僕だけだった。

「食べ物を粗末にするやつは、原点5だぞ」

ツマヨウジで歯をせせっていた校長が、僕を見て言う。林副校長がエンマ帳みたいなのを広げて、何か書き込んだ。

反省会とやらでお説教かなと、げんなりしながら教室から出ようとしたら、怒鳴られた。

「しかられても無視するのか！」

しまった……。

「ごめんなさい。知らなかったので……」

「だから、教えてやってるのだ。知らなかったは、言い訳にもならん。原点さらに3」

「イゴキヲツケマス、アリガトウゴザイマスって言っとくのよ」

後ろにいた小野寺百合さんが耳打ちしてくれた。ので、その通りにした。それと、とっさに考えて。一列に並んだ教官たちに向かって、最敬礼をしておいた。

その場では、それ以上のおとがめは無かった。

男女別に隊列を組んで、ベッドと鉄格子のある教室へ戻った。

食堂にも寝起きする教室にも、教壇の上に掛け時計がある。その針は午後7時10分を指していた。

「反省会まで50分あるね。親睦会の続きをしよう」

綾子さんの言葉で、また僕は女子に取り囲まれた。

「さっさと裸になれよ。マゾってのは露出も好きなんだろう」

嫌いじゃないけど、時と場合による。なんて言い分は通じない。僕は黙ってワンピースを脱いだ。

「最初から思ってたんだけど。その薄ぼけたジンジロ毛、どうにもみっともないね。マゾのくせに生意気なんだよ」

半年前までは発毛していなかったけど、先生と別れた頃から、産毛が黒ずむみたいな感

じになって、すこし縮れてもきた。

T字カミソリを股間に突きつけられた。

「そってやるから、こっちへ来て『気ヲツケ』してな」

ほんと。ここで起きることは、SMプレイばいことばかりだ。でも、僕のペニスは「まったく違う」と言っている。

とにかく。『力が正義』で『目上は正義』だから、逆らわない。

綾子さんがベッドに腰掛けて、その前に僕が直立不動。一部だけはお辞儀しているなんてふざけたことを考える気力も無い。

綾子さんは、うなだれているペニスを掴まんで下へ引っ張って、T字カミソリを上下逆にして当てた。無雑作に上へ動かす。

チリッと痛みが走った。石けんも無しで逆ぞりされて、肌が切れたんだ。

ざりざりざりと、何度も下から上へそられた。そのたびに、小さな鋭い痛みが肌を引っかいた。

それからペニスを上へ引っ張られて、裏側と玉袋も同じようにそられた。

「まあ、こんなものね」

血まみれとまではいわないけど、ずいぶん切り傷ができていた。

翔子さんは、ペニスを掴まんでいた指を僕の唇に当てた。

なめてきれいにしろってことだと思うけど、間違ってたら怒られそうだから、軽く口を開けるだけにした。指が突っ込まれたので、かまないように気をつけて、まだ舌は動かさなかった。

「気が利かないね。クズの上にグズだわ」

綾子さんは指で僕の口をこじ開けて、5本とも突っ込んで舌を弄んでから、乳首を転がすような仕草で指を拭った。

「おまえは、女の子に興味があるんだったね。自分より弱い子……そんなのは、ここにいないけど。でも、寝込みを襲われないとも限らないし」

誰が、そんなこと、するもんか。年上ババアに凶暴少女——なんてことは、口が裂けても言わないけど。

「寝るときはベッドに縛りつける手もあるけど、マゾだから喜ぶだけか」

「搾り取ってやったら、どうでしょうか」

スケバンの京子さんが提案した。綾子さんが年上で順列も上だから、敬語になっている。

「煙が出るか赤玉が出るまで射精させたら、安心して眠れると思います」

「それでいこうか」

綾子さんが僕を振り返った。

「それじゃ、さっそくオナニーしなさい」

と言われても。そんな気分じゃない。いや、そんな気分になっても、絶対に嫌だ。

「……出来ません」

勇気を振り絞って反抗した。

「てめえ。目上の命令にはハイだろ。もっと痛い目に遭いたいのか」

「そんなことされたら、ますます出来なくなります」

「痛い目に遭って喜ぶのがマゾだろうが」

「違います。嫌いな人に虐められたって……」

しまった。口をつぐんだけど、間に合わなかった。

「へえ。おまえは、おれらが嫌いなのか。今の言葉で、女子全員を敵にまわしたぜ」

水くみのときも、淳一さんが同じようなことを言っていた。ぎすぎすしてる。なんて他人事みたいに考えてる場合じゃない。

「ごめんなさい。そういうつもりじゃ……」

「おい、由紀恵。こいつにマンコを見せてやれ。そしたら、オカマでもその気になるさ」

由紀恵さんが、黙って僕の前に立った。短いスカートの中に手を突っ込んで、黒猫フンドシを抜き取った。この人たち、教官も生徒も、みんなおかしい。

「見える？ それとも触りたい？」

由紀恵さんが僕の手を握って股間へ導いた。

あわてて、手を振りほどいた。

「見てよ。罰直は受けたくない。見てよ」

日課表にも書いてあるけど、『罰直』でなんだろう。直接の罰、体罰のことかな。僕にマスコを見せろというのが綾子さんの命令だから、僕が見ないと罰を受ける——そういうことかもしれない。でも、見たら……僕がワナに掛かるんじゃないだろうか。

「見てよ、見てよ」

スカートの裾を持ち上げて股間を丸出しにして、ぐいぐい迫ってくる。

反射的に後ろへ下がったら、ベッドにつまずいて尻餅をついた。目の前に、由紀恵さんの下半身。黒もじゃの中に紅い淫裂がぱっくりと生々しい。海藻が陽に照らされて発するような、生臭い海の香りが鼻を衝いた。アンモニアの臭いも混じっている。水を節約するから、お風呂は1週間に1度だけ。そのせいだ——なんて思ってしまうくらい、僕は醒めていた。のに……条件反射みたいに、勃起してきた。カミソリの切り傷が引きつれて、チリチリ痛むのまで刺激になって。

「大きくなっても、小さいのね」

友美さんの馬鹿にしたような声。小さいよ。最年少だし、きゃしゃだし。

「もしかして、翔子のクリトリスより小さいんじゃないか」

「あの人、毎日引っ張られてるもんね」

どんなふうにも、引っ張られてるのかな。整列ヤスメをさせられて、さっきの僕みたいに手を後ろに組まされて……それとも、大の字ハリツケにされて、皮をむかれてタコ糸とか結ばれて……SMの経験と知識のせいで、そんなシーンが頭に浮かんで、ますます硬くなった。

「さっさと、オナニーしなさい」

こんなになったら、もう嫌とは言えない。せめて……出来るだけ早く射精してしまおう。僕は6人の女子に見られながら、ペニスをしごき始めた。

これまでに体験したSMのシーンとか、アヤネさんとのセックスとかを思い浮かべながら……射精しそうになって気がついた。

「あの……ティッシュが無いんですけど？」

「真上に出して、自分でゴックンしろよ」

京子さんが無茶苦茶を言う。そんなの、戸坂先生にだって命令されたことはない。

「寿美香、そいつの背中を押さえつけてやれ」

寿美香さんが後ろから僕の背中にお尻を乗せた。全体重をのし掛けてくる。逆らわないほうが得策だから、自分でも顔をペニスに近づけた。大きく口を開けて、オナニーを続行。自分の精液を自分にぶっ掛けるなんて初めての体験だ。なんて思ったら興奮してしまって、すぐに射精できた。うまく口に入らず、顔一面に飛び散った。謹慎中はオナニーも（週イチくらいに）控えてたから、顔中べたべた。

自分の精液も、当然だけど他人のと同じような味だった。

射精後の虚脱に、惨めな感情が広がっていく。

「手を休めない。さっさと2発目を出すのよ」

「無理です。男って、そういうふうには出来てません」

せめて10分くらいは休ませてほしい。

「いいから、さっきみたいにこするの。そのうち勃つでしょ」

「綾子さん。おれらが遊ぶときのやり方で、手伝ってやってもいいですか？」

「おれらって……スケバンのやり方？」

「ええ、まあ。遊ぶというか、軟派な男へのリンチですけど」

「へえ。見てみたいわね」

オカッパの京子さんが、お下げをまとめているゴムバンドを友美さんから召し上げた。それを僕のペニスの根元に何重にも巻き付ける。

これは、何度かされたことがある。動脈の圧力で海綿体に血液が送られるけど、静脈がつぶされているので逆流しない。勃起したら、しっ放しになる。でも、これって射精も封

じられる。お腹の奥では射精した感じになるのに、実際には出ない。それが延々と続く。

「そら、しごけよ」

心の底から嫌々、ペニスを摘まんでしごき始めた。心の底からというのは、調教で射精直後に責められたことは何度もあるけど。そのときだって、休ませてほしい勘弁してほしいと思ってる。でも、それは肉体に直結する感情で……心の奥底では、そんな惨めな自分に酔っている部分があった。それが、今になって分かった。

醒めて白けて、この人たちへの反感しかない気分で、機械的にペニスをこする。

ゴムバンドで血行を遮断されたせいか、亀頭に感覚が無い。ちっとも大きくならない。

「なんだよ。クズでグズの上にへタレかよ」

京子さんに蔑まれて、ますます委縮してしまう。

「あたしも手伝ってあげる」

友美さんが黒猫フンドシを脱いで、僕をあお向けに押し倒した。

「こういうの、顔面騎乗でいうんでしょ。マゾなら興奮するよね」

顔を挟んで膝を突いて、お尻を落とした。この子、パイパンだ。でも、性器は小淫唇が2センチくらいはみ出ている、色も黒ずんでいる。ざりざりしてるから、生えてないんじゃないかと、そっている。翔子さんもだった。

なんてことをじっくり考えてる場合じゃない。体重のほとんどを顔面にのし掛けられて、息が苦しい。

「ぶはああっ……ずじゅうう」

お腹に力を入れて息を吐いて、意識して胸を膨らませるようにして、やっと呼吸できる。

「ひやははは……くすぐったい」

友美さんがお尻をくねらせる。ますます僕の顔が女性器にじゅうりんされる。この子、年齢のわりにエッチのやり方を心得ている感じ。男子生徒といろいろあるのかな。

「あたしも手伝ってやる」

京子さんがペニスを握って、猛烈な勢いでしごき始めた。

痛い……息も苦しい。なのに、勃起してしまった。根元を締めつけられて、こっちも痛い。

「ほら……さっさと出しちゃえ。と言っても、出せないか」

びくんびくんとペニスが跳ねた。身体の中では射精してる。でも、ゴムバンドで縛られているから出せない。

下腹部をねじられるような射精感と、出せないもどかしさとが、いつまでも続く。

「出したいんだろ？」

しゃべれないので、こくこくとうなずいた。

「きゃんっ……」

鼻の頭で淫裂を刺激されて、友美さんが小さな悲鳴をこぼした。

ゴムバンドが強く引っ張られて、ぐにゅぐにゅとサオをねじりながらすっぽ抜けた。

どくどくどくっと、噴出ではなく漏れ出た。亀頭が柔らかな感触に包まれて、さらしごかれた。

友美さんが立ち上がって、ベッドから降りた。

口元に、丸められたティッシュが押しつけられた。食べろってことだなと察して、命令される前に口を開けた。押し込まれたティッシュを、もぐもぐとかんで、唾で湿して丸めて飲み込んだ。ほんのりと甘い味がした。

立て続けに2発。まだ赦してもらえない。またペニスをゴムバンドで縛られて。

「あと20分か。遊んでいる場合じゃないね」

僕は4人ががりてベッドに押さえ込まれた。あお向けから脚を頭の上まで折り曲げられて、ペニスもアヌスも女子6人の目にさらされた。

「オカマにサービスしてあげるかな」

綾子さんが教室の隅にあるロッカーからモップを取ってきて、釣り金具のついた柄をアヌスに突き立てた。

「痛い……」

戸坂先生のペニスに比べたらふたまわりは細いけど、針金を三角形に曲げた金具にこすられて痛い。ほんとは黙って耐えられたけど、痛みを訴えておけば手加減してもらえると、計算ずく。

「痛いのが気持ちいいんでしょ」

ぐりぐりとえぐって、さらに奥まで突っ込む。

「お願いします。それ以上はやめてください。S字結腸が突き破られたら、命にかかわりません」

調教を受けているうちに覚えた知識。ディルドやペニスと違って、一直線の棒はどこまでも押し込めるから、注意が必要なんだ。

綾子さんはチッと舌打ちして。それでも、さらに突っ込むのはやめてくれた。浅い位置でピストンさせながら、円を描いてえぐり始めた。ペニスよりも、ずっと痛い。

「さっさと出しちゃえよ」

京子さんが指に唾を吐いて、摩擦で熱くなるくらいに激しくしごく。スケバンて硬派なイメージがあるけど、男性へのリンチで手慣れたのかな。カリクビとか裏筋とかを的確に刺激する。

それでも、硬くなるまでに5分以上はかかったし、射精感が込み上げるまでには、さらに10分くらい。

3発目は、ちよろちよろっとなかなか出なかった。

「まだ出るね。反省会の後も搾ってやろうか」

「無理じゃないですか。こいつ、どうせ懲罰を食らいますよ」

「それもそうか。校長はホモとかレズを毛嫌いしてるし。それに、こいつは無期教育だろうしな」

アブノーマルが世間に受け容れられないのは、仕方がないけど。好き嫌いで生徒を差別するなんて……当然か。ここは、まともな教育施設じゃないんだから。それよりも『無期』って言葉が不気味だった。校長の考える『まともな人間』に矯正されても、出してもらえ

ないんだろうか。

ここへ連れて来られてから、不安は募る一方だった。

不安に苛まれながら、反省会が始まった。調度品の無い教室で、男女に分かれて床に正座。校長を含めて6人の教官たちは、竹刀とか教べんとか平たい板とか、生徒をたたくための得物を手に、教壇に立ち並んでいる。

「今日の過ちの自己申告をしろ」

小塚校長の声に、ほとんどの生徒が手を挙げた。両手を膝の上に置いたままなのは、拓馬さんと……僕だけだった。

林副校長がつけていたエンマ帳は今、校長が開いている。それを見ながら。

「克己」

寛太くんと同い年くらいの佐藤克己くんを指名した。克己くんが起立して整列ヤスメの姿勢。

「ひとつ。朝の農作業で、誤ってハクサイをひとつ、傷つけました。もっと慎重に作業をするよう心掛けます！」

教室が割れそうな大声。

「ふたつ。午後のカッター訓練でミヨシ手に抜的していただいたのに、かえってクルーのリズムを崩す場面が何度かありました。今後も精進に努めます！」

「よろしい。次、肇」

克之くんが座って、元田肇さんが起立した。

「ひとつ。午前のカッター訓練で、大田原教官殿の号令を聞き違えて、皆に迷惑を掛けました。もしも、悪天候下だったら、転覆につながるミスです。猛烈に反省しています」

そんなふう失敗を報告して、改善点とか反省を述べていく。

「ひとつ。朝食の納豆がどうしても食べられなくて、寿美香さんに手伝ってもらいました」

小学校の給食かってのもあった。

「ちゃんと返礼はしたんだろうな」

「はい。玉子焼きを半分あげました」

大真面目に小野寺百合さんが答えた。くすくす笑いくらいは起きて当然の場面なのに、誰も表情を動かさない。

ずっと自己申告が続いて、教官たちも言葉少なに聞いているだけだった。そして、最後に翔子さんの番。

「ひとつ。朝の農作業で、ひとりだけノルマを果たせませんでした。これからは、もっと頑張ります」

「ふたつ。今日もカッター訓練で、みんなの足を引っ張ってしまいました。もっと筋力を鍛えます」

「6メートルカッターなら、今の体力でじゅうぶんだぞ」

「私は、オトコ女のままで、いいです」

翔子さんの返事は棒読みだった。

「みっつ。昼食の集合に5分遅れて、みんなに迷惑を掛けました。これからは5分前の精神を遵守します」

「5分前の5分前だ」

「はい。分かりました」

5分前というのは知っていたけど、さらにその5分前というのは、初めて聞いた。

「よっつ。特別補習のとき、フェラチオで勝吾さんのペニスをかんでしまいました。これからは、息が苦しくても我慢します」

とんでもない言葉が、ここでは日常的に飛び交ってる。

翔子さんは六つまで『過ち』を自己申告した。

「薫。おまえは過ちを犯していないと思っているのか」

校長が、僕をにらみつけた。

「いえ。初めてなので、勝手に分からなかった……」

「言い訳するな。ハイカイエエだ」

「はい。あります」

流儀に従って、手を挙げた。

「よし、薫」

起立して、整列ヤスメ。

「ひとつ。タイマンで2回とも負けました。次は」

「勝つとでも言うのか」

「分かりません。でも、頑張ります」

「今日は手を抜いたのか」

「いいえ。でも……」

「負けたのは、おまえが女にも劣るクズだからだ。過ちというなら、おまえの存在そのものが過ちだ」

「……………」

男になりたい。丸坊主にします。そう言えばいいのだろうか。

「これについては、じっくり考えておけ。申告は、それだけか？」

「いいえ。ふたつ。水くみの作業で、僕だけがノルマを達成できませんでした。次は、もっと頑張ります」

「何を頑張るんだ。女の真似をして、チンポをしゃぶるのか」

「いいえ。ホモだって、相手を選びます」

あちゃあ。こんなこと、言うつもりじゃなかったのに。売り言葉に買い言葉ってやつだ。でも、校長はまったく別の方角から、とんでもないことを言った。

「ふん。男は女を力で従える。女は男を身体で操る。それが世間の実相だ。社会に適合したいなら、このことを覚えろ」

フェラチオで力仕事を変わってもらうというのは、校長公認どころか推奨なんだ。

「みっつ。夕食を残しました。これからは全部食べるようにします」

「申告は、それだけか」

「ええと……これだけです」

親睦で3発も抜かれましたというのは、過ちじゃないよね。

「馬鹿者！」

ばちん。

不意打ちにビンタを食らって、よろめいた。

「もっとも重大な違反を申告しないのか。それとも、過ちではなく確信犯か」

文脈から考えて『確信犯』は誤用だと思うけど。校長が何を言いたいのか、見当がつかなかった。

「あの……何が間違っていたんでしょうか？」

「スカートだ。水くみ作業中にスカートを下ろしていたな」

作業が終わったら、すぐ自発的に戻した。だから、今もフルチンをさらしてる。

「あれは、柴野さんの指示です」

「おまえは教官の指導をないがしろにしてまで、先輩の言葉を優先するのか」

「いえ、そんなつもりじゃ……どうすればよかったですか」

反問もしられるかなと思ったけど、ちゃんと答えてくれた。

「その場で教官に聞け。いなかったら探せ」

「……はい、分かりました。御指導、ありがとうございます」

「よし。最初のことでもあるし、軽い懲罰で赦してやる。就寝時刻まで竹刀正座をしていろ」

教室の隅に正座させられた。ただの正座じゃなくて、膝の裏に竹刀を挟んでの正座。座ったとたんに膝の裏が痛いし、血行が滞って、ふくらはぎから足先までしびれてくる。これで1時間半も正座なんて、ちっとも軽くない。拷問にも等しい。

……もっとも厳しい調教は何度も受けてるけど。マゾ気分とかエッチ気分が皆無なだけに、つらい時間になると最初から分かっている。

校長の矛先が拓馬さんに向かう。

「おまえは、何もないのか？」

拓馬さんが校長を見上げる。反抗的な目つき——と、僕にだって分かる。

「今日一日、教官殿の命令に従って、生徒にも迷惑を掛けなかったと、自分では思っています」

校長がエンマ帳を開いて、うなずく。

「確かにな。しかし、それで善しとするようでは向上心を養えない。深く内省して、わずかな落ち度を見つけようとする姿勢が大切だぞ」

「ハイ、ゴシドウアリガトウゴザイマス」

棒読みよりも、さらに心がこもっていない、そんな印象を受けた。のは、校長も同じなんだろう。拓馬さんをにらみつけて、でも何も言わなかった。

「これで、今夜の反省会を終える」

「ありがとうございました！」

窓ガラスがビリビリ震えた——は、さすがに大げさだけど。

全員が退出して。すぐに校長だけが戻ってきた。

「おまえひとりのために見張りを置くのも手間だからな」

水がいっぱいに入ったバケツを膝の上に乗せられた。両手で支えていないと倒れる。床に下ろせないこともないけど、手を滑らせたら取り返しがつかない。でも、これって——ますます拷問じみってくる。

「モウシワケアリマセン。ガンバリマス」

反省会を聞いていて、どう答えればいいのか分かってきたけど。どうしてもカタカナになってしまう。

ひとり、部屋に取り残されて。天井の細長い蛍光灯も消された。隣の部屋から明りが漏れてくるから真っ暗ではないけれど。心細くなってくる。

そんなことは、いくらでも我慢できる——と、思う。我慢できないのは脚の痛み。竹刀

をひざの裏に挟んで正座させられて、まだ20分と経っていない。就寝時刻の午後10時まで50分もある。

何か考えて気を紛らわそうとしても、今日一日のことばかり思い返して、悔しさと不安とが募るばかり。

このスクール（なんてもんじゃない）では、集団作業を通じて社会に適合できるように教育していくっていうけど。こんなの、教育じゃない。

『力が正義』という校訓は、本物の正義ではないけれど、世間でまかり通っている『ごり押しの正義』だと思う。『目上は正義』というのも、実社会ではそうなんだろうと思う。学校なら先生、会社なら上役。その人の言うことは絶対だ。上役の罪をかぶって自殺したなんてニュースは、珍しくもない。自分の命を投げ出すほどの『正義』……なんて、クソクラエだ。『世間は正義』というのはピンとこないけど。村のシキタリを守らない人を村八分にするとか……『世間体が悪い』というのも、やっぱり、これかな。

だけど、『世間は正義』が正しいなら。このスクールで行なわれていることは、間違っているんじゃないだろうか。それとも。不良少年とか変態性欲者（だと、僕は自覚している）を矯正するためなら、刑務所と同じで、世間は認めるんだろうか。

などという理念とか哲学は、僕の手には負えないけれど。

これから先、僕はここで、どのように振る舞えばいいんだろうか。

男になりたいと言って、坊主頭にしてもらって、菜っ葉服を着て。まわりの男子と同じように……そうすると、翔子さんを虐めなければならないんじゃないかな。あの人は、自分から男にこびるのは嫌だと、それだけが理由でオトコ女を貫いているように思える。自分からこびるのは嫌だけど、男に犯されるのは仕方ないと諦めている。内心は分からないけど、そういうふうに見える。

僕と翔子さんとは、言葉すら交わしたことのない赤の他人。性的にアブノーマルな者同士が助け合う必要もないし、少なくともここで助け合えるとも思えないけれど。でも、僕が……ぴったりの言葉を思いつかないけど。『転向』かな、『意志を曲げる』かな、『自分に

ウソをつく』かな。どれもろくな言葉じゃない。僕がそうするのは、翔子さんへの裏切りになる。なにも約束していないし、翔子さんがどれだけ虐められても僕には関わりのないことだし、ホモやレズに対する世間の偏見と闘うなんてつもりもないし。ていうか、自分が『その他大勢』とは違うんだってことに、屈折した誇りのようなものを……

ああ、もう！

どんどんどん、思考が広がって行って、頭の中がグチャグチャだ。

女の子の格好をさせられて、フルチンをさらして、女子にも男子にも教官にも虐められるのが僕の運命だった——なんて思えてくる。

だけど……。現在の境遇って、どっぷりとマゾヒスティックだよ。なのに、ときめくどころか、嫌悪感しか湧いてこない。

どうしてなんだろう。答をとっくに知っているような気がするのだけど、うまく言葉に出来ない。言葉に出来ないけど、僕の粗チンがそう言っている。戸坂先生とつながりのあるサディストの小父さんたち、『方向性』が違うという小島さん（相撲で男の子を『可愛がる』のが好きな公園の管理人さん）も含めて、小塚校長や教官たちとは絶対的に何かが違っている——と。

蛍光灯が点いて校長が教室に入ってきたので、グチャグチャな思考は不意に中断された。

「じゅうぶんに反省したか？」

「はい」

反射的に答えてから、何を反省するんだっけと、記憶をたどって。

「これからは、分からないことは教官殿に尋ねます」

及第点の返事だったのだろう。膝の上のバケツをどけてくれた。

「よし。居室へ戻れ」

ハイ、アリガトウゴザイマスと言いかけて。女子にされたことを黙っているのも拙いかなと思直した。

「あの……反省会までの自由時間だったんですけど。僕が女子に、ええと、エッチなこと

をする気にならないようにと、オナニーをさせられました。それから手コキもされて……お尻にモップの柄を押し込まれたりもしました。何か違反だったらいけないので、申告しておきます」

「本来なら、生徒間の勝手な性行為と男子生徒のオナニーは厳しく罰するところだが……話を聞いた限りでは、ひとりで行なったわけではないから、強制的な桃色遊戯だな。ペッティング、フェラチオ、アナル行為は、男女間であるかぎり、黙認している」

というのが、小塚校長の返事だった。翔子さんへの輪姦は副校長の指示だから『勝手な』セックスじゃないんだと、またしてもスクールの異常性を痛感した。でも、異常性はそれだけにとどまらなかった。

「それにしても、だらしがない。女の5人や6人、力づくで押さえ込まんか。オナニーするくらいなら、フェラチオくらいさせてやれ」

「でも、みんな僕より世敗だし年上だし……」

「優先されるのは力だ。目上だろうと、力でねじ伏せてかまわん。強姦にまで及べば、『世間』すなわちスクール全体が黙っていないが」

「はい……頑張ります」

女性を殴るなんて、僕には出来ない。しつこいけど、ムチとか縄とか、その中のビンタとかは別物。

ひとりを殴っても、寄ってたかって報復されそうだし。

でも、そんなことまでは言い返さない。ハイって返事をしておいて、女性に虐められて、それを男子や教官に馬鹿にされて。そんな僕を、きっと翔子さんだけは軽蔑しないでいてくれるだろう。それでいい、そうするしかないと思った。

オンナ男じゃなくて男になりたいと思ったら、きっと翔子さんをぶちのめして証明しなくちゃならないだろう。翔子さんの構えは専守防衛だと分かったから、次は勝てると思う。でも、僕は戦わない。僕の一方的な思い込みだけど、翔子さんは、ここにいる他の誰よりも、僕の仲間だ。

それに——小塚たちの思い通りになんか、なりたくない。

という密かな決意のわりには。足がしびれて立てなくて、女子の教室まで廊下をはって戻ったのは、地道に惨めだった。

——そして、女子からの虐めは、朝まで続いた。

「抜きが甘かったから、寝込みを襲おうなんて気になるかも知れないね。手も足も出せないようにしておかないと、安心できない」

リーダーの綾子さんの許可をもらって、1階にあるトイレへ行って、戻ったら、そんなことを言われた。またワンピースを脱がされて、ベッドに両手両足を広げて縛りつけられてしまった。縄じゃなくてシーツを引き裂いて作ったヒモで。備品を勝手に壊して、大丈夫なんだろうか。僕が罰を受けることになりそうな予感がする。

ベッドに大の字ハリツケにされた直後にチャイムが鳴った。全員がワンピースを脱いで、ベッドの横に直立不動。誰もブラジャーを着けていなかった。乳房が大きな綾子さんと寿美香さんと百合さんの3人は下乳にサラシ布を巻いて（乳首は露出して）いたけど、それもほどいた。

山口教官が来て、僕をちらっと見て軽蔑の薄笑いを浮かべて、後はずっと女性のヌードを眺めながら点呼を取って。蛍光灯を消して、外から南京錠を掛けた。

6人の女子（完全なオトナもいるから、女子とは呼びにくいんだけど）は、小さな黒猫フンドシひとつでベッドに潜り込んだ。毛布にくるまって、身じろぎもしない。

真冬なのに寒くないだろうか。なんて、他人の心配をしてる場合じゃない。僕は毛布さえ掛けてもらってない。文句を言っても虐められるだけだろうから、耐えている。

暖房の無い部屋で一晩中。凍死死にはしないけど、風邪は引くかもしれない。

スクールの名前はスパルタンだったよね。文字通りのスパルタ式だ。敷き布団も無いし、マットだってスプリングの利いた分厚いのじゃなくて、体育のマット運動で使うやつ。もしかして、廃校の倉庫から引っ張り出してきたんじゃないかと疑ってしまう。

劣悪な環境で、カッター訓練とか農作業とか水くみの重労働をさせられて、理不尽な虐

めを受けながら——いつまで、ここで暮らさなくちゃならないんだろう。連れて来られた最初の日から、僕は絶望にとらわれていた。

その絶望がまだまだ甘っちょろいものだったとは、そのときの僕はまだ知らなかった。

4. 寒風下の洋上訓練

チャイムの音を夢見心地に聞いていたら、ビンタでたたき起こされた。

「早く起きてよ。課業に遅れたら連帯責任なんだから」

友美さんが僕を見下ろしていた。ちゃんとセーラー服を着ている。

何も考えずに身を起こしたら——身を起こせた。ひどい日本語だけど、手足を縛っているヒモはほどかれていたってこと。

「ベッドの下に洗面道具があるから、持って行くのよ」

セーラー服を頭からかぶって。ベルトを締めて（屈辱でしかないけど）裾を折り返してベルトにスナップボタンで留めて。ベッドの下をのぞき込んだら、小さな台の上に洗面器と手拭があった。洗面器の中には、コップと歯ブラシ。それを全部持って、教室から出て行くみんなの後を追った。

行先は、校舎の前の足洗い場。男子も来ていた。順番に水を洗面器に入れている。僕も列の最後尾についた。洗面器には底から5センチのところに赤線が描かれていて、みんな、きっちりそこまで水を入れている。

蛇口のコンクリ台の上にある小さな箱から歯磨き粉をブラシに着けて、洗面器の水をコップですくって歯磨き。残った水で顔を洗う。そうか、真水を節約してるんだと納得。

洗面器を持って、朝礼台の前に並ぶ。最初に見たときと同じで、男子が2列横隊、女子は1列。僕は女子の端っこ。

僕たちに向かい合って、6人の教官が並ぶ。

朝礼台の上に置かれた大きなラジカセからおなじみのメロディが流れて、ラジオ体操。小塚校長と林副校長と大田原教官は、竹刀を片手に生徒を指導している。指導なんてもんじゃないと思うけど、いちいち突っ掛かっても仕方ないので、そう表記しとく。

「もっと大きく」ばしん。

「胸を張れ」ばしいん！

「皆に合わせろ」ばしん。

胸を張れと指導されたのは、翔子さん。お尻じゃなくて胸をたたかれた。しかも、他の生徒よりも音が大きかった。目の敵にされてる。翔子さんは慣れっこなんだろう。悲鳴もあげなかったし、体操の動作も乱れなかった。

さいわいに僕は指導されなかった。脚をもっと開けなんて（下から上へ）たたかれたら、その場にうづくまるかケンケンするか——ラジオ体操の動作からはずれて、滅多打ちにされてたかもしれない。

ラジオ体操が終わると。

「課業準備ハジメ！」

全員が校舎へ駆け足で引き返す。ので、僕もついて行った。

着たばかりのセーラー服を脱いで、サラシ布を巻いている3人はそれもほどいた。全員が手拭を首から垂らしたので、乳房は（半分くらい）隠れる。

「薫と友美は Cutter 訓練の補習ね」

綾子さんの指示で、僕も友美さんも制服を着たままで手拭を持った。

全員が校庭へ出て。今度は並び方が違っていた。翔子さんを含む男子11人が2列縦隊。最前列に2人と最後尾に1人の教官が付いた。教官はジャージの上下を着ている。奴隷と奴隷監督を連想した。

女子ばかり4人のグループには下村教官が付いた。

制服を脱いでいる15人のうち、男子2人にはムチ痕があった。山重明夫さんのは比較的新しくて、高草壮太さんは薄い青アザになっていた。やっぱりムチ打ちの体罰があるん

だ。アザだけで肌が破れた様子はないから、そんなにハードじゃないらしい。けれど、ムチ打たれてみたいなんて、金輪際思わない。以前にも『ちつとも』とか『これっぽっちも』なんて形容を使ったけど、あれはブリッ子してただけ。『金輪際』には裏の意味なんて無い。

制服を着たままの男子3人と女子1人のグループには教官がいなかった。僕は友美さんと一緒に、大田原教官の後ろに並ばされた。

「課業カカレ」

校長の号令で、2列縦隊は校門に向かって駆け足。女子ばかりのグループは、回れ右して校舎へ。男子3人と女子1人のグループは、裏庭へ。この4人が水くみの仕事をするんだろう。女子ばかりのグループが炊事と洗濯で、外へ出て行った11人が畑仕事だろうと推測した。

「薫にはカッターの基本を教えてやる。友美はお手本だ」

カッターがこのスクールの売り文句だったと、思い出した。島へ拉致されてくるとき、漁船からカッターを見たけど、あんなふうにオールをそろえてこぐのは、僕にはできそうもない。

僕と友美さんは大田原教官に引率されて、棧橋へ行った。棧橋には、木造の大きなカッターが1艇と、FRP製の小さいのが1艇、つながれていた。

「大きいのが正規のカッターだ。長さは9メートルで1.5トン。12人でこぐ。小さいのは6メートルで、こぎ手は6人だ」

9メートルのほうは幅が広いから、4人が並んで座って、2人ずつで1本のオール（長さは4メートル30センチ）をこぐこともできる。6メートルでは無理。そのかわり、オールの長さは3メートル60センチ。

「基本中の基本だが、船の前側をへさきまたはミヨシ、後ろをトモという」

こぎ手も、座る位置によってミヨシ手、ナカ手、トモ手と呼ばれる。ミヨシ手の右舷が1番、左舷が2番というふうに呼ばれることも多い。9メートル艇ではナカ手が3番から10番までである。

「お前は当分のあいだ、3番と4番だ」

こぎ手は艇尾に向かって座るから、みんなの先頭に位置するトモ手がペースメーカー、全体を見渡せるミヨシ手が全員のオールをそろえる役を務める。ナカ手の僕は、トモ手に合わせてひたすらこくだけ。だけど、そのこぎ方が……。

3人でカッターに乗り込んで。ヘサキのロープはレッコ（ほどく）して、トモのロープは目いっぱい伸ばして。教官と友美さんがトモ手の座席に就いた。

座席は公園のボートと同じで、左右に渡した1枚の板。公園のとはちがって、足を踏ん張る板が45度の角度で取り付けてある。

「カイ備え」

艇の中央に並べられているオールを1本ずつ、船べりにあるU字形のくぼみ（カイ座）へはめる。はめる部分は皮が巻いてある。オールは水平にして、先端の細い部分は下から、カイ座に近い太い部分は上から、両手で支える。水をかくブレードは水平。

「こぎ方ヨーイ」

上体を倒して両手を突き出す。

「艇長の合図でこぎ始める。オールを水に入れるときは、自分から見てブレードの後ろ側が斜め下向き45度になるように。足を踏ん張って身体を後ろへ倒しながらオールを引く。まだ腕は伸ばしたまま。オールが真横に来たときはブレードが垂直。最後は腕で引きながら、ブレードを斜め上向きに返して、腹筋で身体を起こしながら腕を突っ張って、最初の姿勢に戻る」

教官が説明しながら、ゆっくりとオールをこいだ。オールが4分の1くらいの円弧を描いて、ブレードが水中で90度回転した。

「つぎは力を入れて一挙動でこぐ。友美、バランスを取れ」

「こぎ方ヨーイ、前エッ！」

ザバアアアッ……と、オールが白波を蹴立てながら一気に水をかいて宙に躍り出た。ら、ツバメ返しみたいに最初の位置まで戻った。友美さんも同じようにこいだけど、艇はぐう

んと鼻先を右へ振った。パワーの差だ。

「よし、やってみろ」

教官が艇尾の一段高くなっているL字形の席(左右で「┌ ┐」の形になってる)に座って、僕が左舷のトモ手に座った。

「こぎ方……もっとカイを突き出せ。友美と比べてみろ」

上体を投げ出すくらいに倒して。

「ブレードが立っている。そのまま水をキャッチすると、走っているときだとカイを取られるぞ」

ブレードを45度に寝かせる。

「そこからさらにブレードを回転させるのだから、右手は巻き込んでおけ」

あれこれ指導されて、「前エッ！」まで1分くらいかかった。

足を踏ん張って、背筋で身体を後ろへ倒しながら……オールがへによへによつと真横まで来たときには、友美さんはこぎ終わっていた。艇は、『お手本』のときとは逆に左へ向いている。

何十回も繰り返して、どうにか形になってきた——ときには、手の平とお尻が痛くなっていた。とくに、お尻。肌と座板が直に擦れるから、ヒリヒリしてる。下脱ぎの罰は羞ずかしくて寒いだけじゃなくて、こういう意味もあったんだ。

ひと休み。オールの端が反対側の船べりから30センチの所に来るまで引き込んで、手を放す。先端(ブレード)が跳ね上がって、隣のオールとX字形になる。これが「カイ組メ」の状態。

手を休めると、寒い。セーラー服の内側まで風が吹き込んでくる。吹きっさらしの下半身は……情けないくらいに縮かんでいる。脚を閉じて、サオも玉も包み込んだ。

「言っておくが、海の上では『女の子のお願い』は通用しないからな」

「……？」

教官の唐突な言葉が理解できなかった。

「教官殿。薫は水くみも自力で頑張ったくらいですから」

「それもそうか。むしろ、『お願い』をするように教育してやる必要があるかな」

やっと分かった。女子がフェラチオと引き換えに力仕事とかを男子にしてもらうのが、ここではあたりまえなんだ。

でも、なんで、そんなことを教官が言ったのか——は、僕の仕種からの連想かもしれない。脚を閉じるのは、女の子の座り方だ。

「とはいえ、女の心得を教え込むのは、矯正の目的に反するな。そちらは、校長と下村教官あたりに任せておくか。俺は男女の別なくカッターで鍛えてやるのが仕事だからな」

短い休息が終わって、カッターの基本教育が再開された。手もお尻も痛いけど、全身が凍えそうなよりは、マシかな。

カッターに乗り込んで栈橋を離れるところから、訓練を終えて栈橋へ戻るまでを、通して教わった——のは、省略。こぐのに比べれば難しくはなかったし、皮膚が擦りむけたりもしなかった。その分、寒さで震えっぱなしだったけど。

カッターの手ほどきが終わって、学校へ戻って。朝食の後は、全員でカッター訓練。朝食も京子さんに半分献上したから、エネルギー補充が不足してる。

男女別に栈橋に整列してから乗艇。6メートルは、女子全員（翔子さんは男子扱い）と大田原教官と川上教官。綾子さんが大田原教官と並んでトモに座ってカジを握った。川上教官は昨日と同じ平たい板を持ってヘサキに仁王立ち。あの板、オールブレードだ。折れたやつは廃物利用だろう。

男子の9メートルは、林副校長と山口教官。こぎ手は14人なので、小柄な（歳も若い）大野田友次くんと大森豊くんは、それぞれ船べり寄りに座って2人こぎ。顔つきで判断すると最年少だし、身体つきもあまり変わらない寛太くんは、2番（左舷のミヨシ手）を務めている。翔子さんと拓馬さんは、5番と6番だった。

「カイ備エ」に続いて「カイ立テ」。オールを目の前で垂直に立てる。ふらつかせるなど、

しかられた。

「モヤイ綱、レッコー」で、ロープをほどいて棧橋を離れる。

棧橋から5メートルほど離れて「こぎ方用意」。

「前エーッ！」

一斉にこぎ始めた——のだけど。

ざば、ガチゴチ……引くのが遅れてトモのオールに追いつかれてぶつかり、戻すのも遅れてヘサキのオールと絡まって。左舷の3本はストップ。艇は右へ流れた。

「薫。落ち着いて、練習通りにやれ」

前のオールに合わせる練習なんか、してない。けれど。

「ハイッ」

言い訳なんかしたら、後ろから板でたたかれるくらいは、学ぶまでもなく分かってる。

何度も発進を繰り返して。僕がなんとか前後に合わせられるようになったころには、男子の9メートル艇は豆粒くらいに遠ざかっていた。

10分くらいこいで沖合いまで出て、ヘサキを島へ向けたところで「カイ上げ」、「カイ組メ」。

メンバーチェンジで、綾子さんが6番に座った。友美さんが6番から4番へ移って、僕は艇長の大田原教官の隣。カジは教官が握った。

「足手まといのオンナ男に、手本を見せてやれ」

足手まといなのは事実だけど、わざわざ言うところに悪意を感じる。

「ダッシュでいくぞ。こぎ方用意」

オールが船べりにくつつくほど、6人がそろって前のめりになった。

「……前エッ！」

がくんがくんがくんと、艇が前後に揺れた。みんな、座板から腰を浮かせて、腕の筋肉が（女性なりに）盛り上がってる。

「ワン、ツー、スリー！」

教官の掛け声に合わせて、エイエイエイと3度に分けて両足を突っ張っている。

がくんがくんがくんと揺れるたびに、艇が加速していく。それを3回繰り返してから。

「ニダーン。ワン、ツウ！」

ワンで腰を浮かして、ツウでぐいーっと両足を一気に突っ張る。艇も持ち上がる感じで、6本のオールが一斉に水を切ると艇首が水をたたいてしぶきが飛ぶ。

2段こぎが5回の後は座ったままのこぎ方になったけれど、僕が混じていたときの5割増しくらいのピッチだった。

5分としないうちに、棧橋付近まで戻ってきた。カジを左に取って、艇は海岸と平行に走る。

「カイ上ゲー」

6人全員が、水平に上げたオールに突っ伏した。ハアハアと、全身で息をしている。顔が汗にまみれている。

すごいなあと、単純に感動した。でも、すぐに——強制労働とかシゴキとか、陰惨な単語を思い浮かべた。

短時間の休憩後に、またメンバーチェンジ。全力を出し切って疲れてる女子に負けたら、いくら最年少できゃしゃでも、男子の面目が立たない。こんな凶暴なオンナどもを相手に、面目もペニスも立てる気にはならないけど。

「こぎ方用意、前エツ」

今度は一発で、オールをそろえてこぎ始められた（のが、あたりまえなんだろうけど）。足手まといにはなっているけど、足を引っ張ってはいないといったところかな。なんてうぬぼれたけど、ちょっとピッチが上がると、またオールをぶつけ始めた。焦って手先でオールを扱うと、ブレードの返しがおろそかになって、水流にオールを持っていかれそうになる。ますますオールをぶつける。

来たときの2倍以上の時間を掛けて棧橋の沖合いまで引き返して、やっと「カイ上ゲ」。そして「カイ組メ」。

女子たちはケロリとしているが、僕は息が上がっている。それでもあまり汗をかいていないから、さっきの全力こぎ直後の女子ほどには疲れていないんだと思う。

「薫は、どれくらい泳げるんだ？」

突然の質問。

「はい。1年の臨海教育では、1キロの遠泳をしました」

深く考えずに返事をしたのは、失敗だったかもしれない。

「それならじゅうぶんだな——足手まといのおまえは、ここから泳いで帰れ」

頭が真っ白になった。そして、これまでに感じたことのない真っ黒な恐怖。

「イヤです。死んでしまいます」

「沖を黒潮が流れているから、海水は暖かい。心臓マヒの心配は無い」

「……………」

安請け合いしてくれるけど、海に飛び込むのは、おまえじゃないだろ。

「女には、ここまで厳しいことはさせない。まだおまえには見込みがあると思えばこそ、愛のムチだ」

猫なで声で言われたって、信じるものか。

「もっと頑張っって、皆に迷惑を掛けないようにします。だから、赦してください」

「畑山ッ！」

怒鳴られたよりも、いきなり名字で呼ばれたことのほうが恐ろしかった。

「気合いを入れられてから海へ投げ込まれるのと、自発的に飛び込むのと、どちらかを選べ」

殴られるだけ損——というより。気絶してから海に投げ込まれたら、確実に死ぬ。

「……飛び込みます」

そう答えるしかなかった。

揺れる小船の中でワンピースを脱いで。トモのL字形のベンチの上に立たされた。

「命綱は付けてやる。沈んだら3分以内に引き上げてやるから安心しろ」

3秒にしてほしい。

艇を棧橋につなぐモヤイ綱よりずっと細いロープ。SMで緊縛されるときは縄と同じくらしいのロープを、教官がベンチの下から取り出した。女子にはさせないとか言ってたけど、ウソだと思った。

教官は、その縄を……くそ、なんてことをするんだ。ペニスと玉袋をまとめて縛った。後ろへ垂れた縄尻を、ぐいぐい引っ張る。

「い、痛い……」

やめてくださいと言いかけた言葉を飲み込んだのは、結果が分かっているから。SMなら「お赦してください」とかキーワードで手加減してもらえる（というプレイもある）けど、ここでは通用しない。

死んでやる。半分は本気で、そう思った。僕が死んだら、さすがにパパも反省するだろう。この施設も警察が調べて、生徒への虐待が明らかになれば、校長も教官も刑務所行きだ。死んでしまったら、そのすべてが無意味になるけど。でも、溺れたら引き上げてくれて、それで赦してもらえると、本気じゃない半分では、そう思っていた。どちらも甘っちょろかったと、特に本気じゃない半分については、すぐに思い知らされるんだけど。

「何をしている。さっさと入水しろ」

ばちんとお尻をたたかれて、バランスを崩して。立ち飛び込みになった。海面を手でたたくのを忘れて、何メートルか沈没してから浮かび上がった。

「海岸は、太陽を正面に見て左だぞ」

命綱に結びつけられている小さなブイが、海へ投げ入れられた。命綱を握っていてくれるんじゃないんだ。沈んだときに引き上げるだけなんだ。

「こぎ方用意、前エツ」

オールが一斉に動き始めた。水しぶきが顔にかかる。

僕を置き去りにしてカッターが遠ざかっていく。

このまま浮かんでいたら、凍え死ぬ。でも海岸は、波間に隠れるくらいに遠い。泳ぎ着

く前に溺れる。僕は、命が助かる可能性に賭けて、太陽を右横に見ながら泳ぎ始めた。

風に吹かれただけ、海の中のほうが暖かい気がする。身体を動かしていると、すこしは寒さを忘れられる。

あれ……カッターが向きを変えた。ヘサキがこちらを向いた。拾い上げてくれる——んじゃなくて、10メートルくらいのところを通り過ぎた。それから、また旋回した。

そうか。僕が泳ぎ着く（か、溺れる）まで、見守ってくれているんだ。

僕はすこしだけ安心して、それまでのゆっくりした平泳ぎを全力のクロールに切り替えて海岸を目指した。ゆっくりだと寒いし、手抜きに思われたくなかった。

さすがに無謀だった。海はプールと違って波があるくらいは、臨海教育のときに覚えたのに。息継ぎの瞬間に波とぶつかって、水を吸い込んだ。むせて、せき込んで。治まるまで、じっと浮かんでればよかったのに、無理に顔を上げようとして、ますます水を飲んだ。じたばたしたせいで、こむら返りを起こして……駄目だ、溺れる。

股間を締めつけられる痛みとともに、僕はカッターまで引き寄せられて。救け上げられた。

「しっかりしろ」

ばしんばしんとビンタを張られた。ふくらはぎをマッサージされて、つまさきを押し曲げられて。こむら返りの痛みが引いた。

「大丈夫か」

「はい」

「では、泳げ」

抱え上げられて、海に投げ込まれた。

もっと休ませてくださいって答えれば良かったんだ。それでも「甘ったれるな」とか、なったかもしれないけど。

もうクロールはやめよう。平泳ぎは脚の筋肉を酷使するので、しばらくは手だけで水をかいて進んだ。

「チンタラするな。本気で泳げ！」

またクロールに切り替えた。7割くらいの力で泳いで、水をかぶっても慌てなければいいんだ。

泳いでいるうちに疲れてきたけど、休むとしかられそう。しかられるのはプライドだけの問題だけど、きっと体罰が伴う。気付けのビンタくらいじゃ済まない。それくらいなら、溺れかけてからカッターの上で少し休ませてもらおう。

もう駄目だ。わざと溺れてひと休みしよう。でも、最初と同じように救ってくれるとは限らない。たしか、沈んだら引き上げると言ってた。さっきは沈む前だったけど、今度は……そんなことを考えながら、無我夢中で手足を動かし続けて。奇跡的に、海岸に泳ぎ着いたというか、漂着した。

エネルギー残量はマイナス。波打ち際に突っ伏して、波しぶきや砂が口に入るのもかわず、荒い息。

カッターは、栈橋へ横付けした。

「やれば出来るじゃないか。見直したぞ」

褒められて、単純にうれしかったし誇らしかった。でも——こういうのがアメとムチなんだと、心の底は、いっそう冷え込んだ。

僕を含めて全員が（フンドシも脱いで）素っ裸になって、海に一瞬だけ浸かって汗を流して、乾布摩擦をしてから制服を着直した。頑張った褒美に、スカートの裾を下ろしていいと言われて、アメとムチでも、ものすごくうれしかった。

訓練の後は短い休息を挟んで昼食。「大食いに挑戦！」みたいな分量のカレーライス。男女で量は違うけど、キングサイズとクイーンサイズかな。さすがに京子さんも僕から食事を半分召し上げる権利を行使しなかった。ので、僕はクイーンサイズを持って余したんだけど（でも、残さなかった）。6人の女子は余裕で完食した。カッター訓練で、すごくカロリー消費するんだ。

もしかして、腕の太さと腹筋で、入所してから長いか短いか見分けられるかなと思ったけど、それは無理と、じきに分かってきた。虐待やシゴキでやつれる分と相殺されるのかもしれない。

食事が終わってから午後のカッター訓練までは、校庭で過ごしてもいい自由時間。でも、1階にある男女一緒に勉強教室で自習する人も多かった。テストの成績も信賞必罰で、罰が厳しいようだ。

ちなみに、教科書と参考書は共有で、個人に支給されるノートも持ち出し禁止。『生活に区切りをつける』という名目だけど——施設で虐待された記録をつけられることを懸念してるんじゃないかと勘繰ったのは、何日か後になってからのこと。

午後からのカッター訓練は、泳いで帰らされずにすんだ。3段こぎとかはまだできないけど、ふつうのピッチでなら、なんとかついていけるようになった。ストローク量がみんなの8割くらいで、ブレードの返しがうまく出来なくて、オールが上下に波打ったりはするけど、前後にぶつけることだけはなくなった。

上達の代償として、手の平の皮がむけて、お尻が真っ赤になった。午後もスカートの裾を上げたままだったら、お尻の皮も破れていたと思う。

そのスカートの裾はカッター訓練が終わったら、元通りに折り返すように大田原教官から言われた。

「艇長の指揮が校長に優先するのは、カッター訓練が終わるまでだからな」

洋上だと、いちいち校長におうかがいを立てるわけにはいかないからだと説明された。昼食の時間中もスカートは下ろしていたけど、これはどうなるんだろう。質問するのはやめておいた。違反してたら、今夜の反省会で懲罰を受けるだけのこと。投げやりになってるなあ。

午後3時前にカッター訓練が終わって、カッターを清掃して、くたくたになって3時半から自習。

そして、午後5時になって。課業という名の重労働は、まだ終わらない。